

第10/11号

1983年

1月25日

# ポーランド月報

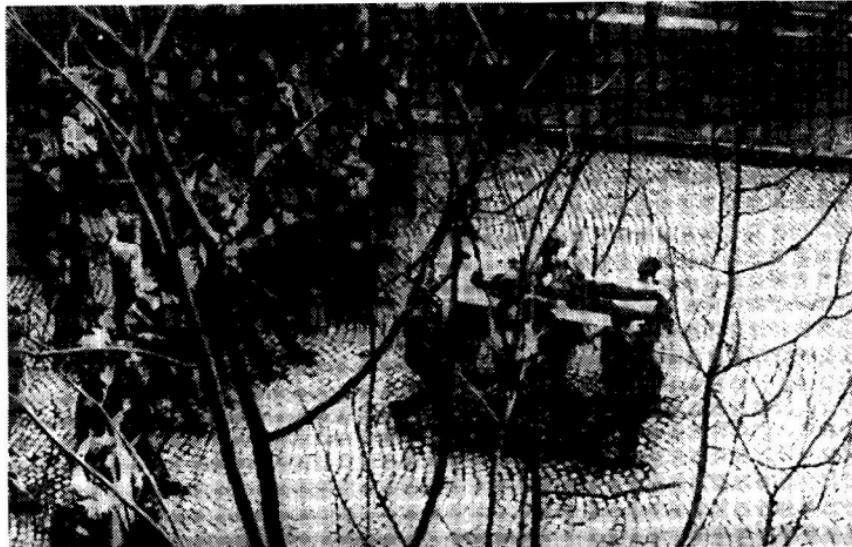
編集・発行：ポーランド資料センター

東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F  
電話03-261-2585 郵便振替 東京2-81069

Center for Polish Research

% Kazukuni Bldg. 3 F

2-10-5 Misaki-cho Chiyoda-ku Tokyo 101



1970年12月、弾圧の犠牲者をのせてクディニアの街をゆく戸板 (8ページ「国旗と戸板」参照)

「連帯」をとりまく諸問題 ..... 2

——「連帯」在外調整局代表に聞く

全世界の労働組合に呼びかける ..... 7

国旗と戸板 1970年12月 ..... 8

## K O R

再出発にあたって ..... 14

——労働者防衛委員会から ——

社会自衛委員会へ

『ロボトニク』(続) ..... 15

——労働者との結合を求めて

自主運営ポーランドをめざして ..... 20

S・ヴィルカノヴィチ

戒厳令に向かうポーランド ..... 24

J・スタニシキス

ポーランド問題と東欧 ..... 27

亡命知識人座談会

ワレサ議長釈放と戒厳令停止 ..... 32

——地下「連帯」文書 ——

ポーランド日誌 ..... 35

バックナンバー総目次 ..... 36

# 「連帯」をとりまく諸問題

## ——「連帯」在外調整局代表に聞く——

Rozmowa z J. Milewskim i S. Czarlewskim

〔編集部注〕 去る82年12月10日、ポーランド資料センターは、来日中の「連帯」在外調整局代表イエジ・ミレフスキ氏（「連帯」全国委員、企業自主運営全国組織「シェチ」事務局長、在ブリュッセル）および同局員スワヴォミル・チャルレフスキ氏（在パリ、ILOへの「連帯」派遣研修生としてスイスにおり戒厳令にあう）と懇談会をもった。その内容を編集部の責任で要約して紹介する。なお、会をもつにあたり、中立労連に時間を調整していただいた。

### ミレフスキ氏あいさつ

ミレフスキ われわれは「連帯」の二度目の正式代表団として日本にやって来た。しかしワレサ議長の訪日のあとで、われわれが「連帯」を代表しなければならないというのは、非常に残念かつさびしいことだ。

たしかにわれわれは、国内の「連帯」暫定調整委員会（TKK）から、戦争〔戒厳令〕期間中、国外で「連帯」およびTKKを代表すべく委任を受けている。しかしわれわれ在外調整局は、たまたま外国にいた「連帯」関係者により構成されたもので、十分な代表権を持たないのが現実だ。状況のゆえ仕方のないことではあるが。

「連帯」は日本の労働組合にも多くの友人を持っている。労働組合は「連帯」にとり自然な友人である。しかし労働組合の任務はまず第1に自分の組合員の利益を守ることであり、「連帯」支援はあくまでも二の次だということを認めねばならない。それゆえ、さまざまな「連帯」支援団体の任務と役割はきわめて重要になる。

ポーランド資料センターの役割と責任は、それが情報を扱っているものであるがゆえにとりわけ重要である。他国とは異なり、日本ではこのような活動が1人のポーランド人の助けも借りずに行われていることに、驚きと感激を禁じえない。

労働組合その他の組織は、支援行動を起こす前に、まず何よりポーランドと「連帯」について知らねばならない。それを知らずに行動することは不可能だからだ。情報活動は「連帯」の弱い面でもあった。それは1981年12月以前でも非常にむづかしかったし、12月以降はいっそうむづかしくなった。われわれ在外調整局自身、悲しいことには「連帯」に関するさまざまな情報を世界中に流す十分な力を持っていない。したがって、世界のさまざまな組織が情報を得るために力を合わせなければならない。とりわけ、ポーランドからの情報は待っていて与えられるものではなく、われわれの方から積極的に得る努力をする必要がある。

「連帯」に関する真実を外国に伝える活動は、最も重要かつ根本的なことである。われわれが何よりも必要としている外国の労働組合その他民主的組織の支援活動のための前提条件を作るものだからだ。ポーランド資料センターがこの重要な役割を果たしつつあることをわれわれはよく認識しており、今後の皆さんのお健闘をお祈りする。

### 「連帯」をめぐる情勢の推移

チャルレフスキ 最初に「連帯」を理解する上で基本的なことを述べておきたい。「連帯」の誕生には4つの基本的因素があった。まず第一に、戦後生まれでスターリン時代を経験していない若い人々が職場に入り活性化した。1970-80年、つまりギエレク時代に成長したその若者たちに、政府は色々な事を約束していた。住宅が比較的早く手に入るとか、乗用車も持てるようになると、ひとりひとりの職業的野心が達成されるとか。しかし実際には働くだけではダメで、顔やコネを利用してうまく立ちまわらなければ何もできなかつた。もちろん「連帯」の構成員にはスターリン時代を知っている人もたくさんおり、その経験を若者に教えた。

「連帯」が生まれた第2の要素は、ローマ法王の里帰りを契機とした道義的精神の再生だ。カトリック教会はポーランド唯一のウソを言わない機関だし、キリスト教倫理もボーランド人の人間形成における非常に重要な要素だ。

第3の要素は、1970年代後半に活動をはじめた民主的反体制派の存在だ。彼らの果たした最も重要な役割は、当局による情報の独占を打ち破ったことだ。共産圏では画期的なことに、検閲されざる大量の地下出版物が読まれた。そして、この民主的反体制派——ほとんどが知識人だが——が、労働者と共に言葉をみつけた。その時ようやく労働者は、文化的・政治的関心を持った一人前の人間だと認められるようになった。民主的反体制派はポーランド初の自由な労働組合の結成もなしとげた。この自由労組には、ワレサ、グヴィアズダ、リス、ブヤクラ、後の組合指導者たちが加わっていた。民主的反体制派は、共産圏でもそういう活動が可能であり、必要なのは恐怖心にうちかづ勇気だと証明したのだ。

民主的反体制グループはいろいろな思想的立場を代表していた。一番有名な社会自衛委員会—KORは、広い意味の左翼的傾向を持ち、社会主義的あるいは社会民主主義的と言える。ビウツキやドモフスキなど戦前の右翼的な諸派の流れをくむ民族独立主義的傾向を代表していたのはROP CIO【人権市民権擁護運動】やボーランド独立連盟（KPN）や青年ボーランド運動（RMP）などだろう。その他に、『ティゴドニク・ボフシエフスキ』紙を中心とするカトリック知識人グループもあった。8月のストに大きな影響を及ぼしたのは、KORとRMPとカトリック系知識人の3グループだろう。

最後の要素は経済的破綻だ。経済は壊滅的で、政府による経済機構の調節は一切きかなくなってしまった。グダンスクでストが始まる前から、全国でストが頻発していた。政府当局は、グダンスクで始まったストを沿岸3都市【グダンスク、ソボト、グディニヤ】だけにとどめようとし、スト工場の統一戦線を阻止すべく分断工作をしたが、ストの波は西側のラジオ放送のおかげで全国に広がった。首席大司教の代表や、それまで活動的だった人々が造船所に集まり、21項目要求が作られた。

造船所ストが始まって2日目に当局側は破格の



ミェチスワフ氏

好条件——2000ズウォティの昇給つまり3分の1のベースアップ——を提示し、ストはほぼ終わりかけた。その時小企業や小さな町の労働者が「俺たちを見捨てるのか」と大工業労働者に言い、そこでスト続行が決まって「連帯」が生まれた。

社会的合意の主なものはグダンスク、シチェチン、カトヴィツェ、ヤストシエンビエのものだ。その調印の直後から、政府は合意の撤回にむけて始動した。合意内容がある程度実現されたのは、「連帯」の圧力があったからで、政府が自動的に合意を守ったことは1度もない。

まず第一に登録問題でもめた。政府は「連帯」の規約を変更させようとしたが社会はそれをはねつけ、「連帯」の勝利で終わった。次の危機は80年12月、ソ連や他の衛星国が「連帯」を非難し、ボーランド領で軍事演習を行った時。その次は81年1月—2月の土曜休日を求める闘い。3月にはビドゴシチ事件。そして党からアナルコ・サンディカリズムとの批判を受けつつ9月の大会に至る。その間に7月の党大会の失敗もあった。この党大会はたぶん「再生」のための最後のチャンスだったが、党はそれを利用する能力がなかった。党が党内水平運動を認めてさえいれば何とかなったかもしれないが、水平運動も排除された。

秋になるとボーランドの状況悪化は加速度を増した。経済危機を脱出するための教会と連帯と当局の和解構想を、当局は一方的にふみにじった。12月、ラドムやジェロナグラや消防大学などで事件があったが、すべて当局の挑発によるものだ。

戒厳令は当局が突然に決定したものかどうか、また戒厳令は回避できたかどうかという質問が出来ると思う。戒厳令がかなり前から準備されていたことは、ヤルゼルスキの軍事委員会での演説から明らかだ。夏に行われた工場の軍事化が秋に撤回されたのも、当局が戒厳令発令の決定をしたこと

の裏付けだろう。

戒厳令が回避できたかどうかについては誰も答えることはできないだろうし、答えようとすること自体無意味だ。つまりそれは全体主義的な国家に自由な労働組合が存在しうるかという問題になるからだ。われわれの答はただひとつ、あの体制には自由労組を導入せねばならなかった。当局から独立した教会や、自営農民がいる体制に、なぜ自由労組があつてはならないのか。

「連帯」の誤ちについていえば、ミフニクが『連帯』は鋼鉄の脚と粘土の手の巨人だったと書いたように、「連帯」は自分の力を過信し、相手の力を過小評価していた。また、「連帯」は変化のテンポを抑えられなかつた。経済危機と当局の無策のせいで労働者の気ははやり、変化のテンポは非常に早かつた。

ミレフスキ 3つの日付を示そう。ひとつは1980年9月2日、グダンスク合意の2日後、タス通信の論評で、「連帯」解体の方向が示された。次は1981年2月11日、ヤルゼルスキが首相になった日。最後は81年10月18日、ヤルゼルスキが党第一書記になった日。つまり、9月2日に連帯解体が決断され、2月11日に誰がやるか決まり、10月18日はどういう手段をとるかが決定された。

### 質疑応答

問 「連帯」が政治権力をとらず、社会の活性化を主な対抗手段にしたことの前提のひとつには、統一労働者党がある程度政治機能を果たしつづけるだろうとの仮定があったと思う。ところが現実には党は非常に脆弱だった。とすれば、権力は党に任せて社会的圧力を増大させるという「連帯」の当初の構想は今後も現実性を持つのか。

ミレフスキ それは大丈夫と思う。「連帯」には政治的多元主義の原則があり、いろいろな政党から民主的選挙で政権党が出てくるということを前提としている。「連帯」は党との関係を規約で厳しく規制しており、組合の指導的活動家は政党における重要な役割を同時に果たしてはならないとされている。労組として党や国家機構とは一切関係しないという態度をとっているのだ。

問 新労組法は「連帯」の目的や機能とどう違うのか。

チャルレフスキ 新労組法には民主的な修辞だけがついて、実際に自由な労組が活動できる法的保証は一切ない。民主的自由労組には、地域や国内の労組代表の組織ができること、規約と綱領が組合員によって作られることが前提だ。新労組法では、1工場にひとつの組合しか存在してはならず、当面は地域的・国内的つながりを作つてはならないとされている。その間に社会的糸を断ち切つて、最終的に昔の官製労組に似た形にするつもりなのだ。当局は労組の規約に文句をつける権利を持ち、工場当局が労組に介入できるとも書いてある。さらに、労組登録を裁判所で行わねばならないという事実は、自主性を完全に抹殺するものだ。なぜなら、民主主義国では三権分立構造だが共産圏は一権であり分立はないからだ。

ミレフスキ つまりこの法律は当局支配という原則の上にある。党の指導的役割とかプロレタリアート独裁とかの言葉は、国民生活すべてを管理することであり、そのために警察やZOMO〔警察機動隊〕だけでなく司法も使われている。

新労組法の修辞は西側向けの宣伝だ。三権分立で複数政党制で地政学的制約がない国においてならあの労組法は進歩的と解釈できるだろう。しかしボーランドの状況では新労組法は独立労組を解体する手段だ。

問 アンドロボフ政権に変わったことでソ連の対ボーランド関係に変化はあるか。またヤルゼルスキ政権下の経済の見通しは？

ミレフスキ ヤルゼルスキには経済政策の展望はほとんどないのではないか。しかしこれは彼個人の問題ではなく、支配層全体の問題だ。ボーランドの経済破綻は、単なる経済的なものではなく、社会経済的なものだ。改善のためにはまず社会的変革が必要だ。最も重要なのは経済改革で人々に労働意欲をもたらすことだ。自分たちのため、國のために働いているという意識、そして労働が無駄にならないという意識をうえつけねばならない。ヤルゼルスキはそうしたことを全くしていない。

アンドロボフについてはまだ情報がないが、歴史的にクレムリンの人事交替で政策転換が起こつたのもたしかだ。われわれにとって良くなるか悪くなるか、いざれにせよ違った政策が出ると思う。チャルレフスキ 指導者が誰であれ、ロシア帝国およびソ連の目的は不变だ。ただ手段は変わる。

チャルレフスキ氏



われわれにとっての問題は、頭のいい暴君と頭の悪い暴君のどちらが良いかという程度のことだ。主観的な答えしか出ないだろう。

問 労働者に本当の働く意欲を起こさせるにはどういうシステムが良いと考えるか。また、生産性向上のためのテクノロジー至上主義をどう思うか。

ミレフスキ 「連帯」の社会経済的改革案にはふたつの原則があった。ひとつは、パンと自由の両方がなければいけない、どちらか片方だけでは行き詰まる、ということ。もうひとつはキリスト教倫理で、労働は日々の糧を得るためにものではなく、人間そのものを形成することだという考え方だ。この点は西側の過度の商業主義とは違う観点だろう。そのふたつの原則から、自主管理やマネジメント改革、銀行・金融財政改革、地方自治提案が出された。そういう手段でそれをするかについてはボーランド人には経験がなく、外国、とくに日本のいろいろな経験をとりいれる必要があった。先日、生産性本部へ行ったが、生産性本部の考えている経済改革の方向性と、連帯の考えが一致したので面白かった。ユーゴのシステムも勉強した。

はっきりしているのは、ボーランドの生産手段の所有形態の問題点を解決することだ。基本的生産手段は社会所有となっているが、それを委ねられているのが国家であってはいけない。最終的には、企業従業員に委ねられるべきだと考えているが、どのようにしてどの程度まで委ねられるのかも規定されねばならない。まだまだ未解決だ。

もうひとつは、経済の中央計画制から脱却し、ある程度自由市場をとりいれることであった。しかし、野放しの自由市場ではなく一定の制限を持ったものでなければならない。どういう形で制限するかも大きな問題だ。独禁法をどういう形で導入するか、生産手段の再私有化をいかに防止する

か、税金や関税をどうするか。

問 日本のロボットによる生産が西欧から注目されているが、反面それにより職場に非人間的関係が持ちこまれると指摘されている。日本の技術が先進的といわれている反面、たとえばさきほど言われた生産性本部その他にも私たちは批判的なのだが。また西独の緑の党は、東西の反核、つまりワルシャワ条約機構とNATOを解体してその地域には核兵器準備基地を一切置かないという提案をしている。そういう運動をどう考えるか。

ミレフスキ まず生産性問題については、2つの方向がある。ロボット化とそれに反対する方向だ。反原発や反ロボット運動は、百年前のイギリスの反蒸気機関運動を連想させる。人口が爆発的に増えているので文明の技術的繁栄はある程度必然である。極言すれば、人々を殺すことで人口増を制限するか、技術文明を認めるかの二者択一しかないのでないか。

だが同時に、労働の非人間化も大きな過ちだ。人間を機械の一部としかみなさないのなら絶対に反対すべきだ。技術的にどう解決するかは専門家の問題だが、いずれにせよ最善の妥協を搜さねばならない。

チャルレフスキ こういう場では意見の相違があってもいいと思うので私の意見を述べる。

生産の機械的自動化はたしかに労働の人間性を脅かす。しかしボーランド人にとってそれは月世界の問題で、やはり先進国の技術はうらやましい。わが国の労働の非人間化は、機械や自動化によるのではなく、体制によってもたらされた。

いずれにせよ人類は労働の人間化と生産の自動化について打開策を見出さねばならないところへ来ているし、見出せると信じる。技術発展の監視と同時に技術を生産現場に導入する際の監視が必要だ。監視システムは中央集権であってはならず、いろいろなグループやイニシアティブが互いにネットワークをつくってすべきだ。とくに精神面で人間性の危機を生まないようにせねばならない。

中欧の非核化については、ラバツキ・プランという中欧非武装化計画があった。この概念は一見すればらしいアイデアで、とくに西独の人は絶賛するだろう。だがこれはチェコ、ハンガリー、ボーランド、東独の問題を解決せず、むしろ現状を固定化するだけだ。平和の概念は、世界平和だけで

なく、個々具体的な国、グループ、家族の中の平和を意味せねばならない。下のレベルへ行くほど平和における自由の意味が重要になる。その意味では東独にもポーランドにも平和は存在しない。

ミレフスキ 歴史的背景からいって、われわれを脅かすのはソ連の戦車であり、核弾頭ではない。もちろん西欧の反核には大賛成だが、われわれを40年間脅かしている戦車はどうしてくれるのか。チャルレフスキ ソ連はたぶん中欧の非核化に合意すると思う。西側国境が解決すみとなれば、欧洲非核化で身軽になったソ連は中央アジアや東南アジアに目を向けるだろう。ロシア人が根本的に拡張主義でないと証明した人はいない。

問 今の平和運動は、ソビエトの戦車を含めた軍事的行動を問題にせざるをえない性質を持っている。また、ソ連は原発を推進している。

ミレフスキ 平和運動はソビエトとアメリカ・ブロックの両方に同時に働きかけるものではなくてはならない。東西ブロックについていうと、西側は任意ブロック（フランスのNATO軍事機構からの脱退がその証明だ）だが東は強制的ブロックだ。ニューヨークと同時にモスクワでも、西ベルリンと一緒に東ベルリンでも反核運動が行なわれないとすれば大きな間違いだ。何百万という良心ある人々の行動が、戦争の危機を少なくするどころか逆に大きくすることもありうるのだ。ソ連は殺りくとか街の破壊に興味があるのでなく、生きている国や街を欲している。そして、巧妙な心理作戦や、アフガンのように通常兵器を使ってそれを実現する。核兵器はおもちゃの鉄砲みたいなものだ。

西欧は「モスクワを怒らせないために非武装が必要だ」と言うが、ポーランド人は西欧はどうかしているんじゃないと言っている。ソ連の政治的目的が本当にわからないのか、それとも恐くてわからうとしないのか。われわれのようにこのシステムの中で何世代か生きないとわからないのだろう。モスクワでは平和デモなど許されない。ポーランドの新聞には、「連帯」以前にはバーシングIIミサイルの記事ばかり、SS20ミサイルについては書いてはいけないことになっていた。

問 先日、今まででは自己限定ある革命であり、今後戒厳令停止あるいは解除となつても「連帯」は社会運動体として残り、いわば自己限定あるレジスタンスをすると言われたが、具体的にはどうい

うことか。

チャルレフスキ 自己限定ある抵抗運動というのはひとつの進化だろう。なぜ自己限定という言葉がつくかといえば、国内的・国際的因素のせいだ。最終的目的は自由で民主的なポーランドを作ることだが、こうした要素のため即座に実現できないと皆が承知している。政府当局は社会に信頼も支持もされていない。普通の国ではそういう政権はすぐかえられるが、われわれは彼らが自分から変わっていくようになると考える。

ミレフスキ 目的は明確だが、どういう手段でどのくらい時間をかけるのかがわかっていない。

問 ミフニクらの軍事裁判に関して聞きたいが、軍事裁判の手続きと方法はどうなっているのか。

チャルレフスキ 今パリで、KOR支援センターができつつある。中心人物はアレクサンデル・スマラルで、KORのすべてを紹介するKOR白書を作成中だ。

裁判そのものは当局によって終始一貫管理されたものになる。裁判所に直接影響を及ぼすことは不可能だ。残るは国際世論の高揚と圧力だけだ。よい結果を引き出すには相当強い圧力をかけねばならない。

もし停戦になれば、裁判が遅れたり、条件つき仮釈放も考えられる。停戦しないなら、できるだけ早く裁判を終わらせ、KORに全部の罪をかぶせるつもりだと思う。

ミレフスキ しかし言っておかねばならないが、KOR裁判は一種のショーであり、KPNの裁判ではすでに判決が下っている。さらに基本的な問題は、数千人の無名の組合員への判決である。すでに3000人が判決を受け、あと3000人が判決を待っている。知識人や有名人はよい待遇を受けている。ビアウォーケンカ取容所は模範的で、国際赤十字やグレンプ大司教にも見せられている。「連帯」支援の歌を歌ったり、サロン的雰囲気だ。クーロンやミフニクは論文を書いて地下出版物に発表しきえしている。本当の弾圧を受けているのは無名の労働者で、ときには拷問で殺される人もいる。知識人の話を聞けば殴られるのはお前たち労働者だぞ、と見せつけるためだ。世界は彼らのことを知らず、弁護しない。このことはKOR裁判に弁護の声をあげるときにも忘れてはならない。

# 全世界の労働組合に呼びかける

## 「連帯」指導者に対する裁判を許すな

Oświadczenie Biura Koordynacyjnego NSZZ "Solidarność" za Granicą  
z dnia 23. XII. 1982 "Solidarność i Wytrwałość"

12月23日、ポーランド当局は独立自治労働組合「連帯」全国委員会の106人の委員のうちの次の7人を起訴すると発表した。

アンジェイ・グヴィアズダ 元レフ・ワレサの補佐役  
セヴェリン・ヤヴォルスキ マゾフシェ地区副議長  
マリアン・ユルチク シチェン地区議長  
カロル・モゼレフスキ ヴロツワフ地区副議長  
グジェゴーシュ・パルカ 全国委員会幹部会員  
アンジェイ・ロスプウォホフスキ カトヴィツエ地区幹部会員  
ヤン・ルレフスキ ビドゴシチ地区議長



グヴィアズダ



モゼレフスキ



ヤヴォルスキ



ロスプウォホフスキ



ユルチク

この7人は戒厳令布告以来今日まで収容所に拘禁され、自由を奪われた状態にあったため、戦時法を犯すことなど不可能であった。それゆえ、ポーランド人民共和国当局は、「戒厳令以前の組合活動によって起訴されることはない」というヤルゼルスキ将軍のたびたびの公約や決定を破ったことになる。これでは、レフ・ワレサおよび950万人の「連帯」組合員の安全保証が守られるかは疑わしい。今後、すべての組合員は自らが被告にされるかもしれないと考え、逮捕やその他の迫害に備えることを余儀なくされる。

われわれは全世界の民主的労働組合に対し、今日この日を独立自治労働組合「連帯」全体に対する刑事裁判が開始された日として認識されるよう訴える。われわれの組合は本年10月8日に非合法化されたにとどまらず、今やポーランド当局によって犯罪者組織として扱われる可能性がある。

われわれは世界の民主的な労働組合に対し、このかくも重要な問題に関して態度を表明し、ポーランド当局によって始められた反組合的行為に反対する可能な限りすべての行動をとられるよう訴える。



ルレフスキ

ブリュッセル、1982年12月23日

独立自治労働組合「連帯」在外調整局

マウゴジャタ・ニエザビトフスカ

Sztandar i drzwi

Małgorzata Niezabitowska

Tygodnik Solidarność nr 37, 11.VII.1981

**【訳者解説】**アンジェイ・ワイダ監督「鉄の男」をごらんになった方は、弾圧の犠牲者を戸板にのせ国旗を掲げて行進するシーンを覚えておられると思う。ここに紹介するのはあの国旗と戸板の物語である。

1970年12月事件については、政府側に膨大な資料が保存されていると見られるが、その公表はずっと拒否されつづけた。「連帯」の顧問集団である社会労働センターOPS-EZも70年事件を記録に残そうと当時の証人らからの聞き書きをつくり、努力を続けた。しかしその全貌はいまだ明らかではなく、殺された人々の数さえ正確にはわかっていない。

70年事件犠牲者の慰靈碑建立は80年8月のストライキの重要な要求のひとつであった。ポーランドの社会の人々がなぜ70年12月にこだわりつづけるのか、その理由をこのドキュメントの中に見出せると思う。

このドキュメントは1981年12月11日付週刊『連帯』37号に掲載された。血にまみれ、ぼろぼろになった国旗の写真を冒頭に置いたこの号が発行された2日後、軍事政権はポーランドの社会に宣戦を布告した。

なお、本文中でふれられている70年事件の写真については「連帯」の厚意により当ポーランド資料センターにも同じものがある。あわせてその一部を紹介する。

戸板。撃ち殺された若者がその上に横たわる。6人の男たちが運ぶ。赤と白に染めわけられた国旗が前をゆく。うしろには灰色の群衆。この写真は、葉を落とした木々のすき間からこっそりと撮られ、世界中を駆けめぐり、権力の弾圧、労働者の戦い、そして、犠牲のシンボルとなった。1970年12月、グディニャ。

撃ち殺されたのは、政府を信じきった、無防備の、なんの罪もない人々であった。かれらは仕事に出かけるところだった。それは[統一労働者党]中央委員会第一書記スタニスワフ・コショウエクの呼びかけに応じたものであった。コショウエクの演説はその前の晩テレビで放映された。市内では1枚のガラスさえ割られず、弾圧の口実になる事件はひとつとして起きていないかった。にもかかわらず殺戮は起きた、大量の、そして残酷な殺戮が。

70年代はずっと、グディニャの事件について話

すことも書くことも禁じられていた。検閲による禁止は無条件、かつ絶対であった。おおやけの場ではダンスクとシチエン、この2つだけが12月事件の起きた場所であった。

グディニヤは恐怖の支配がつづいていた。人々は「8月」の前にはもちろん、「8月」のさなかでさえもおびえている。ある人々はいまなお恐れている。それゆえ、あの2つの記念碑〔1980年、グディニヤに建てられた70年12月事件犠牲者を記念する碑〕はきわめて大きな意味がある。それは、もはや決して真実を圧殺することはできないというあかしである。

1980年のストライキが勝利に終わったあと、〔パリ・コミューン〕造船所の労働者たちは、すぐに記念碑を建てなければと思った。ポーランドの歴史の教訓によれば、一寸先に何があるのか、「大きいなる自由」がどれくらい続くものなのか、それは決してわからないのだから。碑を建てるべき場



所は2つ。それに異論はなかった。1つは造船所そばにある電車の駅に近い陸橋。ここですべては始まったのだから。

整然と仕事に向かう労働者たちに機関銃の弾丸があびせられた。ヘリコプターからの銃撃で17歳の青年が殺された。誰が言うともなく青年は戸板で引き上げられ、行進が始まった。人々は歩いた、絶望と恐怖にうちひしがれ、何が起きたのかを市当局に見せるため、そして問い合わせるために—

なぜ? どうして? 殺された青年は市議会へと運ばれていった。道みち、いく度となく警官隊が人々を襲った。追いかけ、殴りかかり、銃撃をあびせた。捕えられた人々は市議会へ連行された。そこに作戦司令部はあった。そこはまた処刑の場でもあった。むごたらしく責めたてられ、そこで何人が殺されたのだろう。それはいまもわからない。生きのびた人々はいまなお沈黙する。だからこそ、2つ目の記念碑の建立はその市議会の前に、市の中央広場に決定されたのだ。だがそれはまだ建っていない。建立計画はいくつも提案されたが、どれも多数の賛同を得られなかった。とりあえず、2メートルの大きな十字架が建っている。十字架はそこで何が起きたのかをさまざまと思いおこさせる。あと5年はもつだろう、とそれを作った人々は言う。

造船所そばにはすでに1年前〔1980年〕から記念碑がある。3ヶ月の突貫工事の末、70年12月

事件の10周年記念日にそれは除幕された。そう話しながらも、12月事件犠牲者記念碑の建立社会委員会の人々は、どうしてそんなことが可能になったのか、わけがわからないでいる。人々は熱に浮かされたように働いた。夜も昼も。寝食を忘れて。とにかく記念碑はつくらなければならなかつた、と彼らは言う。

美しく簡素な記念碑。1970という数字が空に大きくかかっている。ただ、「7」の数字だけは、まるで重い傷を負った人間のように身をよじっている。しかしその人間は倒れてはいない。仲間たちが彼を支えているのだ。「7」のモデルはアダム・ゴトネル、造船所の労働者。彼の話は彫刻家スタニスワフ・ギエラダの創作意欲をかきたてた。アダムは彫刻家のためにモデルを引き受けた。

## 黒い木曜日

〔1970年〕12月17日。アダム・ゴトネルは一番方の勤務に向かうところだった。グダンスク、ソボト、グディニャを結ぶ主要交通機関である電車は奇妙な動きをしていた。電車は駅と駅の間でしばしば止まり、駅での停車時間はしだいに長くなっていた。グディニヤ中央駅のスピーカーからは、造船所には行かず帰宅するように、という男の声が流れていた。アダムは列車を降り、となりにとまっていた電車に乗りかえた。その電車はまもなく出発して彼は家に帰れるはずだった。「帰ってもうひと眠りだ」と彼は考えた。朝の5時30分だった。

途中の駅では人々がプラットホームを歩き回っていた。どこも張りつめた霧氷気だった。アダムは考えてみた。すべてがうさんくさい。昨日コチヨウエク第一書記が仕事に出ると説いたばかりなのに、今度はどこの誰ともわからない男が正反対のことを命じている。ワナかもしれない。遅刻すればクビにするつもりかも。

アダムはグダンスクでの出来事を耳にしていた。党本部の焼打ち、市街戦。しかしグディニャはごく平穏だった。昨日は戦車が造船所を包囲したし、ポルスカ通りには戦車や装甲車が列をなしてとまっていた。兵士たちは、まるで10月革命の映画に出てくるようにむき出しの弾帯をたすきがけにつけていた。それでも別にひどいことをするわけで

なかった。かれらは兵役の宣誓をすませたばかりの若い兵士たちで、おびえていて、自分でもなぜそこにいるのかわからていなかった。

造船所の労働者たちはこぞって軍隊を見物に出て来た。いつだつて軍隊の出動はある種の見ものなのだ。労働者と兵士は親しげに口をきいていた。輪重車が来ていなかったので労働者たちは兵士に弁当をわけてあげた。何を恐れることがある？

「何もないさ、とにかく仕事に行ってみるか」とアダムは思い、もう一度列車を乗りかえた。列車は造船所の方に向かって動き出し、間もなく到着した。

駅は群集でごったがえしていた。造船所は封鎖され、誰も通れなかった。2、3分ごとに次々と列車が人々を運んできた。一番方は全部で9500人いた。アダムは何が起きたのか見たいと思った、しかしプラットホームとおもての通りを結ぶ階段と跨線橋は人で身動きできなかった。そこで彼は線路づたいに歩いてゆき、柵をのりこえて陸橋の上に出た。目の前に戦車がいた。それは、夜中じゅう移動をつづけ、いまその砲口を駅に向けて造船所の入口を封鎖したところだった。砲塔には機関銃が据えられていた。

陸橋も人でいっぱいだった。ほとんどが男だった。彼は落ちついていた。魯えてはいなかった、むしろびっくりしていた。労働者たちは仲間同士で話をしていた。ここにはもう兵士との接触はなかった。アダムは歩道にいた同じ部の仲間の横に立った。2人が声をかけ合おうとしたちょうどその時、戦車の砲塔の機関銃が人々に向かってひとしきり火を吹いた。

氣味の悪い光景だった。少し前にはそこに立ち、歩き回り、しゃべり合っていた人々が、いま、どこか奇妙で緩慢なけいれんを起こしたかと思うと、陸橋の上から人影が消え、すべての動きが途絶えた。ただ死体ばかりが折り重なって倒れていた。もう道路は見えなかった。横にいたアダムの仲間も倒れた。アダムは彼を支えた、しかし、その支えは何の役にも立たなかった。すでに銃弾が彼の頭を碎いていた。アダムは彼をまっすぐ立たせようとした、が、すぐに気づいた。彼はすでに息絶えていた。左手は伸びきり、膝あたりまで垂れていた。

アダムも6発の銃弾を受けていたが、まったく

気がつかなかった。6発の銃弾は肩に穴をあけ、心臓ちかくで肺を貫通し、肩甲骨を碎いた。だがアダムはそのまま歩きつづけた。とにかく戦車めがけて。銃口の前に立ちふさがり、死のうとした。しかし、意識の最後のひらめきが彼を階段へ、生へと導いた。

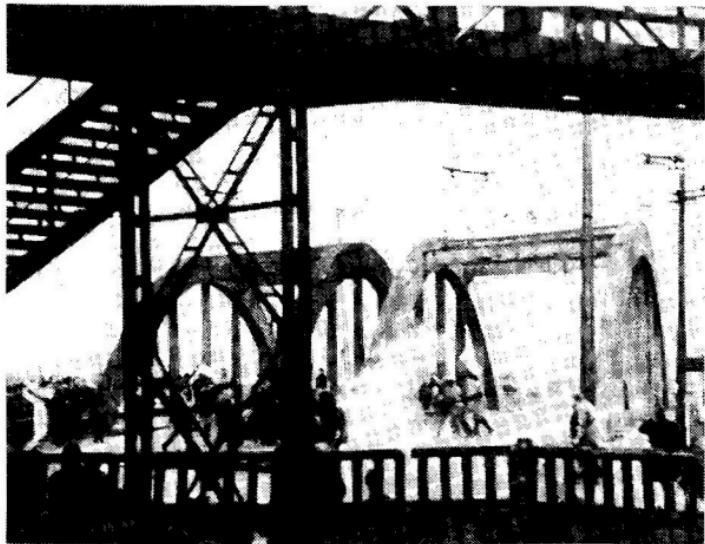
アダムは、つまづかないように、倒れないようにと必死に戦っていた自分を覚えている。倒れたら2度と立ち上がりはしない。彼にはわかっていた。死体の上はやわらかで足元がおぼつかず、ひどく歩きにくかった。足は支えを見い出せなかつた。やがて、ぼんやりとした光だけしか見えなくなつた。その時、仲間たちが彼の体をつかまえ、両側から支えてくれた。ほっとした。やっと死ねる。彼は気を失つた。仲間たちに支えられ、力なく頭を垂れたその姿をスタニスワフ・ギエラダは刻みだした。

ぼんやりとした光は自動車のヘッドライトだった。けが人を収容するため臨時にしたてられた小型トラックが止まっていたのだった。仲間たちは彼を荷台のまん中にかつぎ上げ、床に寝かせた。けが人は多く、すぐに場所がなくなった。そこでアダムが、生きられる望みがないと見なされて外に出された。そこはふたたび柵のそばだった。仲間たちが彼を見つけ、次の臨時病院車に運びこんだ。同じことが繰り返された。けが人を運んでいた人々は、アダムは間違なく死ぬ、だから場所を譲るべきだと考えた。しかし仲間たちは抵抗した。アダムは次の車で病院に送られた。

その途中、アダムの断片的な意識には兵士たちの姿が焼きついている。その兵士たちは車を止め、ドアを開けてドイツ語で何やら叫んでいた。寄せられた報告にはこれと同じ話が数多くあった。最初は誰ひとりそれが何のことだか理解できなかつた。が、やがてわかった。兵士たちは、ドイツ軍降下部隊が町を占領しようとしていると説明されていたのだった。そのため、兵士たちは——少なくともそのうち何人かは——ドイツ軍と戦っているのだと思い込み、けが人にドイツ語で話しかけたというわけだ。

病院の入り前の敷石には大きな血だまりができていた。待合室の扉と床も血まみれだった。しかし内部には一瞬たりともパニックが起きた様子はなかった。病院では2日前から、つまり、グダン

われわれは  
忘れない



何人がこのようにして倒れたのか



橋の上の衝突  
ヘリコプターから狙撃された者も多かった



スクの街頭で市街戦が始まった瞬間から準備は整っていた。院長のテレンシスキは1939年の9月戦役〔ドイツ軍侵攻時〕で軍医をつとめ、のちに國內軍AKに入った医師で、何をどうすべきかよく知っていたし、同僚の医師たち、とりわけ若い医

師たちに、あらかじめ心がまえをさせてもらいた。

アダムは診察ののち、ベッドに寝かされ、点滴を受けながら手術の順番を待った。

そのころ、造船所そばの駅には、階段にも陸橋にもすでに誰ひとり残っていなかった。人々はそ

の場をのがれ、身を隠していた。一部は線路わきの壁のかげに、また一部は貨車の中に。貨車の割れた窓ごしに頭の上を弾丸が飛びかっていた。残りの人々は線路の反対側にたどり着き、そこでひとかたまりになって、途方にくれてなりゆきを見守っていた。

最初のヘリコプターが飛んで来た。ヘリコプターの開け放ったドアからライフルを構えた男が乗り出しているのが見えた。発射された弾丸がひとりの青年に命中した。彼は17歳、工業専門高校の生徒だった。人々は彼をとりまき、支え上げた。この愚劣な行為を、無意味な殺人を彼らはこの世のすべての者に示したかった。凶悪犯に罰を与える。人々は町へ向かって動き出した。その時、扉が目にとまった。そばのパラックから扉がはずされ、そこに遺体がのせられた。誰かが国旗をもち出した。国旗は殺された若者の血で染められ、先頭に掲げられた。

最初は200人、あるいは300人の集団だった。しかし時がたつにつれて新たに人々が加わっていった。若者も、女性も。ひとりの女性が黒いスカートの一部を裂き、国旗のさおの先に結びつけ、喪章とした。

行列はチャルヴォネ・コシニエルイ通りを進み、それからボヤズドヴァの陸橋をくぐって線路の向こうに出て、市議会へ向かおうとした。しかし線路の向こう側には軍隊がいた。大きな装甲車と戦車。指揮は海軍の上官だった。彼はピストルをふりまわしながらヒステリックに叫んでいた。ここは通行禁止だ、射殺するぞ。人々は一瞬立ちどまつた、がすぐにグディニヤ中央駅まで戻り、地下の横断歩道を通って反対側に出た。

スタニスワフ・シュクトニクが加わったのはそこだった。彼もまた造船所労働者で、明けがた仕事を出てきたのだった。彼は陸橋での殺戮と、そのあと、戸板をかけた行進を見ていた。シュクトニクは行列と並行して土手の上を歩いてきた。そして行列がドヴォルツォヴァ通りに出ると、土手を駆けおりて先頭を歩き出した。戸板を担いでいた男のひとりが疲れてきたのを目にすると彼は近より、「おれが代わろう」と言った。彼は殺された若者を運ぶ6人の男のひとりになった。彼は、6人のうち現在その氏名が確認されている唯一の人間である。

なぜああした行動を、という問い合わせる——「何か勇気みたいなものが湧いてきたんだ、おれだって素手で鉄砲に立ち向かえるんだという勇気だ。あの若いやつは殺された。どういったらいいかわからないが、あの時にはたぶん、みんなが感じていただろう、悪いのは誰なのかをはっきりさせなければってな。仕事だ、仕事だとざんざん言っておいて、それでおれたちが信用してやって来ると、まるで鳴でも射つみたいにして人間を殺す。何があっても前に進まなければならなかつた」。

ヘリコプターはその後も何機もやって来て、催涙ガス弾と煙幕弾を落とした。人々は息がつまり、涙を流した、しかし前進した。2月10日通りからシフェントヤンスカ通りに曲がった行列はさらに市の中心部を通過した。行列は途切れなくつづいた。人数はますます増えつづけた。行進の中にも、歩道にも、窓辺にも、人々はますます多くなっていった。みんなが一緒に歌っていた。「ポーランドいまだ滅びず〔国歌〕」、「ロタ〔抵抗歌〕」そして、ポーランドの歴史の転換期にはいつもうたわれる数々の歌を。

エドムンド・ペプリンスキが自宅の窓からこの見事な写真を撮ったのはまさしくこの時だった。急いで、そしてこっそりと彼は写した。誰かに見つかるのがわかった。見つけたのが警官であろうと、行進する人々であろうと、何が原因でフィルムが取り上げられてしまうかわからなかった。それは貴重な資料だった。あとで、デモ行進の参加者を捕えるのに利用され、さらに、法廷での証拠写真になるかも知れなかった。彼は懸命に隠し通し、10年が過ぎた。そしてようやく1980年8月、ペプリンスキははじめて写真を焼き増しして、それをグダンスクの「連帯」へ届けた。

通りではますます熱気が増していく。市議会の近くは催涙ガスの厚い壁が行手を阻んでいた。その壁のうしろには完全武装の警官隊がいた。スタニスワフ・シュクトニクにはもう何も見えなかった。眼ははれ上がり、ともすれば倒れて戸板を放してしまいそうだった。近くの男に、代わってくれと頼むと、彼はすぐそばの門のかけに身を隠した。

しばらくしてそこから出ると彼は自宅にいる造船所労働者用ホテルに向かってかけ出した。

途中のシロンスク通りで警官隊の襲撃があった。だが彼はそこを無事にさりぬけ自宅にたどり着いた。その日の午後、ホテル前の通りを警官の長い隊列が通過していった。人通りの絶えた街頭をパトロールしているのだった。それを目にするとシュクトニクも、彼の仲間たちも手当りしだいに物を投げつけ始めた。彼らは全員が早朝の事件を目撃していたし、直接の参加者もいた。警官たちに窓ガラスやなべ、フライパン、椅子などが降りそそいだ。指揮官は発砲の命令を出した。一斉射撃が窓に向かれた。ホテルを攻撃するには警官の数が少なすぎた。そこには1000人以上の若い男たちが住んでいた。彼らはすぐさま外へとび出した。

ホテルの窓には1枚のガラスも残らなかった、だけが人は出なかった。ただ、シュクトニクの同宿の男だけはショックのあまり、ベッドにもぐり込んでしまい、もはやそこから引っぱり出すことはできなかった。あとになんでも彼は夜毎、「射たれる、射たれる」と叫んで日をさますことがつづいた。1ヵ月後、彼は精神病院に収容された。

その間にも、殺された若者を先頭にした行進はつづいていた。市議会の前で本物の戦闘が始まった。ここはとくに警官の数が多く、そのふるまいも荒々しかった。デモの参加者たちはガス弾を拾い上げてそれを警官隊に投げ返していたものの、もはや呼吸すらできない状態だった。人々の数はみると減っていった。うちつづく攻撃にたまらず、戸板を扭いでいた男たちはそれを放り出し、逃げた。人気の絶えた通りに若者の死体と戸板だけが残された。こうして行進は終わった。

ヴィエスワフ・カスプシツキはその頃すでに市議会の建物の中だった。年は17歳、負傷していた。午前6時30分、いつものように造船所そばの専門高校に行く途中で事件を知った彼は自宅に戻った。家には誰もいなかった。看護婦だった母は女手ひとつで彼を養っていた。その母は病院の勤務に出でていた。ヴィエスワフは家にひとりで待っていた。銃声や叫び声を聞いているうちに彼はがまんできなくなり、ついに母のところへ行こうと決心した。家は市議会の近くだった。そのため、家を出たとたんに警官と出くわした。彼はこの警官に、市立病院へ行きたいと話した。一緒に50メートルほど歩いた。いきなり彼は後頭部に強い打撃を受けた。

それは警官が長さ80センチの棍棒で殴りつけたものだった。

ヴィエスワフはなにか気を失ったまま市議会の建物に引きずりこまれた。そこではいちどきに100人以上もの人々が長時間の拷問を受けていた。ヴィエスワフは何度も意識を取り戻した、だがその度に激しい殴打が加えられふたたび意識は薄れてゆくのだった。やがて彼は地下室に引きずってゆかれ、裸にされて他の死体と一緒に床に並べられた。

それから少しして、警官のひとりが負傷し、通りかかった救急車が止められた。乗っていたのはヴィエスワフの母が働いている病院の医師で、ヴィエスワフのことは子供の時分からよく知っていた。地下室に案内された医師はそこで偶然に、床に横たわっているヴィエスワフを見つけた。一瞬も躊躇することなく医師は彼を車に乗せるよう看護婦に指示すると、すぐに市議会の建物を出た。偶然がさいわいして市議会の中はちょうど混乱のまゝ最中だった。誰にも見とがめられずに市議会を出て車に乗りた。出発しようとした時ひとりの警官が制止しようとした。だが救急車は立ち込めた催涙ガスの中を突っ切り、警察のガス弾に追われながら病院までたどり着いた。ヴィエスワフのためにチーンを持ったボイラーマンたちが護衛に立った。病院のおもては運転手や看護婦、通りがかりの人たちが守っていた。警官隊は引き上げざるをえなかった。

病院に着くまでの間ずっと救急車の中ではヴィエスワフを蘇生させる努力がつづいていた。彼の頭は髪の毛を引きむしられ、生きしい傷口を見せていた。上気色のふくれ上がった血だらけの顔で彼は「叩かないで、叩かないで」とだけ弱々しくつぶやいていた。病院の医師や看護婦は朝からさまざまな場面を見、多くのことを経験していた。しかし、子供の時からずっと成長を見つづけてきた若者の、まさしく死ぬほど責めさいなまれたその姿は本当に胸をうつ衝撃だった。看護婦、医師たちが担架のまわりに集まってきた。ある者は泣いた、ある者は呪いの言葉を吐いた。

# 再出発にあたって

—労働者防衛委員会から社会自衛委員会へ

Kwartalnik polityczny ANEKS, 1978 London

以下に紹介するのは、労働者防衛委員会KORが結成されてから1年後、当初の目的(弾圧された労働者の援助)をほぼ達成し、その目的と活動範囲をさらに広げるために社会自衛委員会KSSへと改組した際の声明である。この時にKORはKSSとなったわけであるが、略称としては「労働者防衛委員会」を意味するKORをうしろにつけてKSS-KORとしている。翻訳のテキストは、ロンドンの亡命ポーランド人による政治季刊誌ANEKSによる1978年11月発行の小冊子「社会へのアピール」に入れられているものを利用した。〔訳者〕

## 声明

1976年9月23日、労働者防衛委員会KORは発足した。〔76年〕6月のストライキとデモンストレーションのために弾圧された人々を法律面、財政面、および医療の面で援助し、解雇された人々をその技能に応じた職に復帰させ、仕事の継続と職場ならびに社会生活における諸権利を保障し、1976年6月25日の労働者の抗議行動にたいする弾圧の規模、関連するすべての出来事の詳細を明らかにし、諸権利の侵害や拷問を行った責任者を公表してその者を処罰し、社会不安をひきおこした諸問題を公平な立場から調査するために国会内に議員特別委員会を設置させる、これがKORの目的であった。これら要求がかなえられればKORの存在理由はなくなる。

1976年6月25日の事件に参加して逮捕された人々はすべてすでに釈放されている。解雇された人々の大部分はあらたに職についた。しかし、数は少ないながらも依然として職をえられず、苦しい状態にある人々もいる。拷問やそのほか法の侵害行為に責任ある者たちの公表という要求はいまだ実現していない。6月事件の起きた事情を公平な立場から調査するための議員特別委員会設置を要求する世論の声に国会は耳をふさいでいる。

6月事件による弾圧の犠牲者にたいする法律面、財政面、および医療の面における援助というKORの当初の目的は達成された。少数の例についていはいまだ援助が必要とされてはいるものの、救援活動は基本的には終了した。しかし、6月の諸事

件とは関係なく政治的理由により弾圧され、みずからの権利獲得をめざして戦っている多くの人々にたいする援助もまたKORに求められている活動である。公安機関SBや警察MOの無法行為、裁判の経過、刑務所内の扱い、等々のさまざま問題が山積している。KORはこうした社会的に重大な問題を避けて通ることはできない。このことは、救援センター設立および社会自衛基金設置の宣言の主旨でもある。こうした状況において、以下に名を署したわれわれは、委員会の目的と活動範囲の拡大を必要とみなすものである。ゆえにわれわれは労働者防衛委員会KORを社会自衛委員会KSSへと改組することを決定した。

社会自衛委員会KSS-KORは、いまだ実現をみていないKORの諸要求実現をめざし、6月事件のために弾圧され、いまなお助けを必要としている犠牲者の援助を続行する。

社会自衛委員会KSS-KORの任務は以下のとおり。

- 1 政治、イデオロギー、宗教、人種上の理由による弾圧にたいして戦い、同じ理由で迫害されている人々を援助する。
- 2 法の侵害にたいして戦い、不法行為の犠牲者を援助する。
- 3 市民的諸権利と自由を制度的に保障するために戦う。
- 4 人間としての権利、市民としての権利をめざすすべての社会的イニシアティブを支持し、防衛する。

KORは1年間にわたる活動でポーランドにお

ける悲しむべき無法状態を記録にとどめた。そこにはまっさきに見てとれるのは捜査機関や刑務所、さらには裁判所や各種審判所による権力の乱用である。われわれはわれわれの活動をさらに継続する。なぜなら、支配するものの権力乱用にたいして最も有効な防衛手段とは市民の生き生きとした連帯であると信ずるがゆえに。また、権力の専横の源泉とは主に、利害の一一致する個人やグループの権利を守るために、国家から独立した組織の結成を禁じられた社会の無力さにあると信ずるがゆえに。

ワルシャワ 1977年9月26日

社会自衛委員会K S S-K O R

(署名者34名 略)

[訳: 篠崎誠一]



自由なくしてパンはない

『ロボトニク』(続)  
——労働者との結合を求めて  
聞きて: 『週刊連帯』編集部  
"Robotnik" — Tygodnik Solidarność nr 2, 10.IV.1981

(9号の19ページからつづく)  
社会主義とポーランド国民の伝統

ヘレナ・ウチヴォ なんとなく自然に左翼運動をとり上げるようになっていました。もっとも、それは私たちが労働者の中で活動していたというだけの理由からですが。でも、少なくともそれと同じくらい重要視していたのがポーランド国民の伝統です。ポーランド社会党P P Sをおおざっぱに紹介しましたし、ポーランド史の論文も出しました。

イレナ・ヴィチツカ 私たちはうその歴史を拒絶しようとしました。でもそれは、過去の具体的な思想を個々にとり上げることが目的ではなく、人々が共通の言葉を持てるように、さらによくお

互いが理解し合えるようにとの思いからだったのです。

ヤン・リティンスキ もう1つ。『ロボトニク』という誌名の問題があります。われわれはこの名称がポーランドの社会主義運動の不屈の伝統、つまり、ユゼフ・ビュスクィに結びついていると思っていました。とは言ってもそれは、われわれがこの名称を選んだ決定的な要因ではなく、まっさきに訴えたかったのは「労働者」という言葉の持つ政治的意味であり、この言葉に1956年6月や70年12月、76年6月の事件が与えた意味なのです。

『ロボトニク』が紹介したのはひとつのものの見方だった、そう言っていいでしょう。それは左翼運動の伝統、とくにその平等主義です。われわれは断固とした社会的平等の信奉者でした。加えて

われわれは世界情勢にも敏感でした。ローマ法王を特集した号〔1979年の法王訪問の時〕はわれわれの左翼性と少しも矛盾していません。そこで引用したヨハネ・パウロⅡ世のノヴァ・フタでの説教は、左翼運動とキリスト教共通の伝統にたいするはっきりとした呼びかけになっています。

ヘンリク・ヴエツ われわれの基本的な考えはどうちらかと言えば左翼的であり、社会主義的だった。もっとも、意識的にそう定義づけたわけではありませんが。主眼は労働運動の創出を援助するという点にあったのです。労働者が自分のことを労働者だと自覚するための助けになりたい、そう思っていました。ワルシャワの仲間うちでもわれわれのような考え方を持つのは少数派でした。ある意味では孤立していたとも言えるでしょう。友人たちの大部分は、それよりもっと重要な問題があるという意見でした。地方にいって労働者たちと会ってほしいとか、「ロボトニク」に何か書いてほしいとか、そう説得するのはたいへんでした。それだけになおのこと、いま、われわれの考え方が実り多いものとなったのを見て本当に満たされた気持ちでいます。

ヘレナ・ウチヴォ 言葉の問題だけでもたいへんでした。たとえば、「労働者階級」という用語は1度も使ったことがありません。ごまかしに利用された言葉を使うのは怖かったのです。簡単でわかりやすい言葉をつくり出すことに私たちは成功した、そう思っています。決まり文句や情緒だけに訴える言い方は避けるようにしていました。

イレナ・ヴィチツカ 16号の時ですが、誌上討論会を企画しまして、何人かの人たちに『ロボトニク』の批評を頼んだのですが、それは労働者ではなくて……

——すると誰に？

イレナ・ヴィチツカ タデウシュ・コヴァリク、クシシュトフ・ウォリツキ、それにリチャルド・ブガイの3人です。それでたいへんな論争になりましたね。コヴァリクは労働者自主運営の考えを説く、私たちは納得しません。とにかく、私たちの役割は働く人たちの利益擁護、これはもうはっきりしていましたから。生産活動がめざす利益と目的、それと働く人々の利益の対立はよくあることです。『ロボトニク』が労働組合誌の性格を持つのは当然でした。私たちの提唱した自由労働組



\*70年事件の記録写真\*  
「万国のプロレタリアート、団結せよ」と看板を掲げたのはポーランド当局だが……(19頁の写真につづく)

合の理念は種々さまざまな伝統に訴えかけるものでした。だからこそ理念にしろ政治思想にしろ、いろいろな考え方を持つ人たちを『ロボトニク』のまわりに集めることが可能になったのです。

#### 労働者の権利憲章—自由労組の結成

——『ロボトニク』の特徴は理念を扱ううえでのプラグマティズムにあった。知識人たちはよく仰々しい言葉を書きつける。しかしあなた方はそうしたすべてを地上に引きおろした。「労働者の権利憲章」は誰にでもわかりやすい、明解で現実的な模範となる綱領でしたね。

ヘンリク・ヴエツ その新しい綱領でわれわれはある誤りを犯しました。もっと広い見方が必要だったのです。われわれは『連帯』のような大きな運動が起こるとは予想できなかった。

——自由労組が実際に結成されるようになった時、あなた方の見方はどうでしたでしょう。

ヤン・リティンスキ カジミェシュ・シフィトンがクラクフで自由労組をつくりました。われわれにはそれが気に入らなかった。そのグループには労働者としてヴァデク・スレツキしか入っていないからです。弾圧から自衛するにはこれではあまりに弱すぎる、そう思いました。シフィトンの運命は明らかでした。結局、彼は刑務所から出るのにKORの救援センターしか当面にできなかったのです。その後、グダンスクでクシシュト

フ・ヴィシュコフスキがわれわれの強い反対を押し切って沿岸地方自由労組を結成しました。グダンスクでは成功でした。組合の活動家たちはここではすばらしく組織されていて、組織は労働者の間にしっかりと根づいていたからです。ボーランド青年運動RMPの助けを借りて彼らは12月事件の記念式を組織しました。それから急に自由労組の名がたいへん有名になったのです。われわれのところにいろいろな人たちがやって来て、彼らのところでも自由労組をつくりたいと言う。われわれは反対しました。弱い自由労組はつくってほしくなかった、労働者の間で十分に成長していないような自由労組は望んでいなかったからです。だから自由労組が結成されたのはグダンスクとシチエチンだけだったのです。われわれが必要としていたのは、自由労組に加入する決心はつかなくてもいい、ただ、なんらかの行動プログラムを支持し、そこに自分を表現する何かを見つけ出すことのできる人、そういう人たちでした。「労働者の権利憲章」はそのために発表されたのです。

### 旧労組内の活動

——旧労組内の活動の試みは散発的で、むしろしぶしぶと言った印象を受けますが。

ヤン・リティンスキ 公的な組織には入るべきでない、べつに根拠もなしにわれわれはそう考えていました。われわれは純潔でいたかった、そのために工場評議会選挙の重要性も見のがしてしまった。

ルドヴィカ・ヴェツ 私が言ったでしょう、3年に1度は選挙があるんだからって。

ヤン・リティンスキ 選挙について基本的なことを教えてあげるべきだったし、投票と立候補を勧めるべきだった。おまけにその方が安全に活動できたのですから。ズビギニエフ・ヤナス〔のちにウルスストラクター工場『連帯』議長〕は『ロボトニク』に触発されて旧労組に加入しました。そこで少しあは活動できた。

ヘンリク・ヴェツ 私の考えでは、ブヤク〔のちに『連帯』マゾフシェ地方本部議長〕とヤナスは旧労組内部で組織化を学んだわけではなく、外の反対運動の中でそれを学びとったのでしょうか。旧労組内の活動はたかだか2、3ヶ月にすぎない。

私はほかの労働者たちにも旧労組内の活動を勧めてみた。しかし彼らはそんなことは無駄と思っていた。そこに転機をもたらしたのが「労働者の権利憲章」だった。それは活動の目的と方法を明らかにし、目的にかなった効果的な組合運動の組織化を可能にするものだったのです。とにかく、行動の指針もなしに公式の組合に入るの無意味だった。

ヤン・リティンスキ 「憲章」が発表された後、われわれのところには、労働者の間に根をおろした、労働者を本当に代表できる人たちがやって来るようになりました。あと必要なのは具体的な行動プログラムだけになった。

ヴィトルド・ウチヴォ 「憲章」を出す前は、われわれのところにやって来るのはみんな労働界の異端ばかりだった。ところが「憲章」が出てからは労働者の活動家たちがやって来た。

ヘンリク・ヴェツ [1980年] 7月はすべてを大急ぎで片づけなければならなかった。ウルスス〔トラクター工場〕での最初のストライキのあとのことです。ウルススのストライキ委員会のためにヘレナとルドヴィカは手当増額の要求実現をめざす行動プログラムを作成した。そのプログラムをわれわれは、ウルスス全体の、つまり、ひとつやふたつの部門にとどまらない、企業全体にわたる自由労組結成の基盤にしたいと考えていたのです。

ヤン・リティンスキ ブヤクはそのプログラムを「労働者委員会」の行動プログラムにしたいと考え、そのために学者たちの意見を求めてきました。そこでワルデマル・クチンスキ〔経済学者〕は無条件でそれにサインした、もっとも、学者としての彼はきっと涙を流していたでしょうね。なにしろ手当増額要求ですから、インフレーションとか、その他もろもろのことが頭に浮かんだことでしょう。ほかの学者たちはためらっていました。

### 知識人と労働者

——知識人と労働者の関係はどうでしたか。

イレナ・ヴィチツカ ラドムとウルススの労働者は財政面や法律面で援助するのはそれほどむずかしくなかったのですが、互いに理解し合い、なんらかの情報を提供してもらうとなると、それは

もうたいへんでした。

ヘレナ・ウチヴァオ ヘンリクとヤンは労働者とうまくいっていましたね。それに、ルドヴィカもところによってはそうでした。もちろん、ユゼク・シレニエフスキやボグダン・ボルセヴィチもです。

ヴィトルド・ウチヴァオ 話のうまいへたなんて重要ではない、ただ、人の話を聞いてあげられるか、言葉にたいする心くばりができるのか、それがすべてだった。

### 『ロボトニク』の編集

——どの程度まであなた方はグループとして活動していたのですか。

ルドヴィカ・ヴェツ いつでもグループとしてです。ひとりがノートを持ち込む、するとみんながそのまわりに集まり、情報をあれこれ検討して、わかりやすい言葉に直してゆく。まあいいだろうと思うまでには文章ひとつで10も質問が出されました。だから、ある記事についてその筆者と言える人物は私たちの中にはいないことになりますね。

——でもいちおう専門はあったのでしょうか？

ルドヴィカ・ヴェツ ええ、外回りと記事の文章化と技術にはわけられます。たとえばヤンですが、彼は運動のきっかけをつくる活動家でしたし、行動プログラムの原案も書きました、それに歴史論文も書いています。ヘンリクは外を歩き回り、しんぼう強く話を聞き、たとえば炭坑の4交替制のような、私たちにはまるでわからなかった問題をよく勉強していました。ヘンリクも記事を書きましたね。ユゼク〔シレニエフスキ〕は外に出て、運動を組織したり、情報をやまのように持ち帰ったりしましたが、記事はぜんぜん書けませんでした。ボグダン〔ボルセヴィチ〕は活動家ですね。大量の情報を仕入れてきて、それを渡してくれるのです。私たちはそれをただ編集すればよかった。私たち女性3人がレイアウトを受け持っていました。ダリウシュは『ロボトニク』配布と技術的な問題もいくつか担当していましたが、あとになつて書き手としても登場してきます。

ヤン・リティンスキ 『ロボトニク』の編集は主にヘレナとルドヴィカとイレナがやっていました。しかし、マンネリに陥るのがこわかったので

編集方針を根本的に変えるために2、3人ずつ交替で編集を受け持つようになりました。全員が編集作業のはじめから終わりまでひと通り経験していますね。もっとも、ヴィトルドはずっと技術担当でしたが。

——財政的にはどうでした？

ヘンリク・ヴェツ 編集作業はすべて無料奉仕でした。交通費だけは出していますが。ほとんど全員が本職を持っていたし、「内職」の方も少しさはあったのでね。職場をクビになった労働者は、救援センターから何ヵ月間かは援助が受けられました。

——すると雑誌発行の資金はどこから？

ヘンリク・ヴェツ KORから月1万ズウォティの補助金がありました。しかし6号の時すでに労働者金庫を設立して募金をはじめています。『ロボトニク』そのものは無料で、ビラと同じでした。せいぜい労働者金庫に払い込んでもらうくらいで、1980年になってようやく一部分を売るようになったのです。西側の組合活動家たちも何人かはわれわれの助けになってくれました。

ルドヴィカ・ヴェツ 出費も増えました、なにしろ紙代はどんどん値上がりするし印刷代もかさんでくる。苦しかったですね。社会的活動はしたい、けれども生活もしなければ、というわけで。

——会計はだれが？

(一齊に) ヘンリク。

### グダンスク自由労働組合

——自由労組の問題に戻りましょう。とくにグダンスクの組合と『ロボトニク』の協力関係についてうかがいたいのですが。

ヤン・リティンスキ グダンスクの自由労組はずいぶんと攻撃的になりました。当時の政府にしてみればそんな組織からはできるだけ脱けてもらいたかったのでしょう。自由労組の創立者たちのうち3分の1にたいして20万ズウォティ出すという話がありました。組合結成時にした自分の署名を撤回すれば5万ズウォティもらえたわけです。それでも、その撤回を再度撤回すれば、またもや、それをさらに撤回させようとしてすぐにも残りの15万ズウォティが出された。

ヘレナ・ウチヴァオ グダンスクの弾圧はシロン



\*70年事件の記録写真\*  
1970年12月、弾圧の犠牲者のために花輪をささげる人々  
(16頁のものと同一の写真の一部)

スクと同じくらいひどいものでした。自由労組に入ればすぐにクビ。ある時などいっどんに何ダースもの事件が裁判所に持ち込まれていたほどです。

ルドヴィカ・ヴェツ グダンスクの人たちがワルシャワにやって来た時のことで、私たちは落ち着いた生活を送り、集まってはいろいろと話し合いをしている、それが彼らには理解できなかった。家宅捜索を受けでも彼らの反応は私たちとはまるで違っていました。彼らは決して妥協しないし、その態度はたいへん激しいものでした。

——それでもグダンスクの活動家グループはいちばん組織がしっかりしていたのでしょうか？

ヘンリク・ヴェツ 1977年に〔70年〕12月事件の記念式を組織できたほどですから。

ヤン・リティンスキ そう、そのあと、アフジェイ・ヴィシュコフスキが海事審判所で有罪判決を受けるという事件がありました。その事件で自由労組は力を發揮して、以来、全国的に名が知られるようになりました。われわれは全国に10万枚のビラをまきました。それからですね、いろいろな人たちが名のりを上げ始めたのは、アンナ・ヴァレンティノヴィチやレフ・ヴァウェンサ、アリナ・ビエンコフスカがわれわれのところにやって

きました。

ルドヴィカ・ヴェツ アリナが来るのは12月記念式の時よ。

ヤン・リティンスキ まあ、そんなふうにしてグダンスクに強力な活動家グループができ始めたわけです。

イレナ・ヴィチツカ おもにインテリが集まってきたできたワルシャワの場合とはたいへんな違いでした。なにしろ労働者と技術者とから始まったのですから、意志の疎通はすばらしかった、彼らには共通の言葉があったのです。

ルドヴィカ・ヴェツ それに、自分たちの雑誌も出したし……。

ヘレナ・ウチヴォ 『ロボトニク・ヴィブジエジャ』〔沿岸地方の労働者の意〕を出しながら、私たちの『ロボトニク』も配布してくれて、それにグダンスクでは定期的に、活動家と労働者の会合が持たれていました。そこで12月事件のこと、労働組合のこと、などを話し合ったり、労働者の権利やポーランドの歴史を勉強していました。

ヤン・リティンスキ [1980年] 8月の下地はすでに1年以上も前からでき上がってきました。79年にアンジェイ・グヴィアズダが48時間の拘留を受けた時、かれが働いていた工場の「エルモル」はストライキの警告を出したし、80年1月にアンナ・ヴァレンティノヴィチが造船所を解雇された時には、彼女のいた部門がストライキを組織した。レフ・ヴァウェンサの解雇には「エレクトロモンタッシュ」の労働者委員会が立ち上がった。

ヘンリク・ヴェツ 運動の組織化、それは『ロボトニク』発刊にあたってのボグダン・ボルセヴィチの基本構想でした。単なる雑誌発行ではなかった。その狙いが適中したわけです。

イレナ・ヴィチツカ でもそれは私たちみんなの考えでもあったわけでしょう、べつにボグダンひとりの考えではなかった。はっきりしていたのは、『ロボトニク』のような雑誌には社会的な運動を背景にした支持が必要だということ。ワルシャワで私たちが成功しなかったからと言つても、私たちがそれを望んでいなかったということにならない。ただ、まわりの状況がグダンスクとは違っていたというだけだと私は思います。

[週刊『連帯』第2号 1981年4月10日付]

訳：篠崎誠一]

# 自主運営のポーランドをめざして〔I〕

ステファン・ヴィルカノヴィチ

“Ku Polsce samorządowej”  
Stefan Wilkanowicz

Tygodnik Solidarność nr23, 4.VIII.1981

〔訳注〕前2回にわたって従業員による企業自主運営の問題をとり上げた文献を紹介したが、今回は自主運営（自治）の範囲を社会全体にまで広げた見方を紹介する。以下に訳出した論文は、1981年の「連帶」第1回全国大会にむけて行われたさまざまな議論のひとつであり、それはまた、『ポーランド月報』創刊号で紹介した「自治共和国クラブ創設期成声明」（1981年12月3日付）の考え方にもつながるものである。さらに、この論文は *samorząd* という言葉についての基本的な概念を説明するものもある。翻訳ではこの言葉を「<sup>マツモジヨウ</sup>自主運営」あるいは「自治」と、場所により使いわけた。

ポーランドにおけるコヘルニクス的転回の始まつた「80年夏」から1年が経過した。

社会は権力の中央機関の周囲をただいたずらにめぐることをやめ、一方、中央機関は社会の新たな運動からとり残された。

社会はみずからの諸権利を手に入れ、その使い方をおぼえ始めた。大衆の運動がつくり出され、それはさまざまな分野における改革の原動力となつた。

現在われわれは第2の局面に入りつつある。すなわち、経済の自主運営のきざしが見えはじめ、危機脱出の試みが多方面から出され、さまざまな人々が自治の運動を開始した。こうした出来事は、労働組合の分野における変革と同じくらい大きな意味をもつ。

現段階は、何をどうすべきなのかをさらに深く考察することが求められている。ここで問題なのは勤労者による企業の自主運営のみではない、社会生活全体、そして社会のなりたちもまた問題とすべきである。かつて存在したことのない、はじめての課題がわれわれの前に置かれている。それは重大かつ急を要する課題である。一見それは新しい、きわめて困難な問題に見えるかもしれない、だが、実はとりたてて新しいわけではない。まずは歴史に目を向けてみよう。

## アブラモフスキの予言

「……推測してみよう。何か革命の神意のようなものの具現として、社会主義の理念を奉げる陰謀家グループが現われる。その陰謀家グループは僥幸にめぐまれて国家機構を奪取し、それから、生まれ変わった警察の力を借りて共産主義による統治をはじめる。さらに推測をつづけよう。人民の意識はその統治にまったく関与せず、すべての物事が官僚によって運ばれる。こうした場合に起こるであろうことを考えてみると……新体制はこれまでの法にとどく所有関係を廃棄するが、人々の精神的よりもろとしての所有の欲求は残る。生産の分野における公然たる搾取は廃棄されてもその内的要因はすべてそのまま保持され、そこから人間ゆえの不正が生まれ、搾取が表面化するに十分な領域はつねに大きく残されるであろう。経済の分野でこうした現象がなくなったとしても、人間が関係する限りは他の分野において現われるものである。所有から発する利益を抑えるために共産主義の体制は国家権力を広範囲にわたって使用せざるをえず、人々の当然の欲求もその地位を追われよう。そうしてこそはじめて、共産主義の社会制度は生存をつづけ、思い通りに発展できるのである。新しい体制は官僚主義的絶対主義の原則にもとづく国家によってのみみずからを守ることができる。なぜなら、強権によって新しい体

制に組み入れられた社会において民主的な政府をつくったりすれば、革命が手を触ることのできなかった人間の魂に生きづけるありとあらゆる社会的諸権利の要求が頭をもたげてくる。そうなれば体制は脅威にさらされるからである。こうして共産主義はひどく表面的で、弱々しいものになる。のみならず、個人を抑圧する国家へと変身を遂げ、それまでの階級に代わって新たに市民と官吏という2つの階級がつくられる。新しい2つの階級間の反目は社会生活すべての面にあらわれてくる。したがって、もし共産主義が人間のモラルの変革を伴わないままその人為的な姿を維持しつづけたとしても、いざれは自分で自分を否定することになろう……」——この文章は、19世紀末にポーランド有数の社会主義者エドワルド・アブラモフスキ〔訳注〕が書いたものである。ゆううつな予言といえよう。だが、アブラモフスキの著作には楽天的な命題（予言というべきか？）もまた見い出せる。いわく、近代的な、発達した社会においては、たとえ最良の国家機構といえども社会の円滑な運営は保障の限りではない（なぜなら、国家機構とはもともと人為的なものであり、しだいに姿を変えてゆく社会生活に適応できないのだから）、それが保障されるのはただひとつ、新しい要求と問題にしなやかな対応ができる自治の組織によってのみである。こうした組織であってこそはじめて、個人の健全な社会的成长を保障し、イニシアティブと創造性を發揮する条件を整え、共同して果たすべき任務を教え、普遍的に善なるものにたいする敏感な感受性を育て上げることが可能になる。そしてアブラモフスキは自治社会の展望を示す。いわく、人間の社会化は教育と共に仕事の実践を通して達成されるべきであり、行政による強制の結果であってはならない。後年、教育と人間の精神的欲求にますます大きな力点を置くようになったアブラモフスキは、社会化に対立する概念として国有化を挙げ、所有関係の変化は自動的に人間のモラルの変質を招くという命題を出した。そこで彼は、社会主義の形態が外的に変化した場合、理論で予想するのとは正反対の結果さえ生じうる、すなわち、国有化と社会化とは同じものではなく、むしろ正反対のものになりうると述べている。

## 権力と社会

ポーランドでは最近の10数年間で急速かつ徹底的な国有化が行われたが、しばしばそれは社会化と誤って称されている。国有化は経済および政治の機関から始まった。がのちにはさらにその範囲が広がり、ついには、私の見るところ、あれこれの機関の国有化どころか、社会生活全体が国家機関によってさん専された、と言えるほどの規模になってしまった。官僚機構はそれ自体、膨張し、みずから権限を拡大して権力を強化しようとする傾向をもつ。わが国においてその傾向はとくに強く、度を超えて進んでいる。国家機関はこれまで、企業や種々の協会、協同組合、自治団体、といった本来自的に運営されるべき組織をみずから内部に吸収し、それら組織の機能を無効化してきた。そして、時がたつにしたがい、国家機関の構成員たちはありとあらゆる組織の主人、すなわち、ポーランド人民共和国の主人としてふるまい始めた（意識的だったのか無意識であったのか、また、皮肉なめぐりあわせだったのかは不明だが）。そうして年月が過ぎた。すると、国家機関が権力を絶えず強化しようと努めること、さらに、そうした行為を何か聖なる行い、不可侵で全知全能、無謬の行い、至高の賢明さと人類の希望を具現する行いであるかのごとく扱うことがあたりまえとされるに至った。

国家権力の強化には2通りのやり方が考えられる。ひとつは非集権化、すなわち、地方行政機関およびその他の自治団体への権限委譲を基本とするものである。こうすれば中央政府直轄の範囲はせばめられるが、その代わり、パートナーとして国家権力に協力して共同の仕事をする機関の数は増加し、そのぶん統治の効率は増して中央指導部の力は強化される。遺憾ながらポーランドにおいてこうした建設的な権力強化の手段はとられず、社会との協力関係は実現しなかった。実際にとられたのは破壊方式であった。つまり、社会を分断し、その自然なきずなを（家族のきずなさえも）断ち切ったうえで、あらためて人々を既存の団体とか社会グループとかに依存させて官僚機構の翼賛団体をつくり上げることにより権力強化を図るという方式が強行されたのである。社会の団体や

グループは独立性を喪失して信頼を失い、やがて、社会教育の主体としての役割も失った。なぜなら、このように主体性をなくした団体やグループから学べるのは偽善と目和見でしかないのである。

しだいに主体性をなくしていく団体の例として、1956年に創設された労働者評議会 R Rを挙げられよう。はじめの頃それは十分に大きな権限を持ち、企業活動に影響を与える団体であったが、それも長くはつづかず、新しい法律の発効とともに、実質的には統一労働者党の機関員が代表のはほとんどを占める労働者自主運営評議会 K S Rに組み込まれ、独自性は埋没させられた。協同組合もまた同様の過程をたどった。ポーランドの協同組合（とりわけ消費協同組合）は長い伝統を誇っている。それは、形式的には、たとえば全国的に緻密な販売店網を持っていたりするが、ここでも抜け目なく適用された中央集権化により（協同組合活動の管理・指導に関する無数の条文に縛られ）実際には、たとえば協同組合経営の店と国営の店との間にはなんら差異は生じていない。同様に、かつてはさまざまな形式を持っていました農村の自治活動もその自主性を失った。たとえば、農業協同組合はいまも存在はしているものの、現実には国家の農業政策実現の道具と化している。しかも、その国家の農業政策という代物は農業を破局へと導いているのだ。ゆえに、農村における自治の再生はぜひとも必要であり、農民自身もまた、みずからの、眞の農民組合創設を強く求めている。

上記のような例は、社会の他の分野においても存在し、社会全体が国有化されつつあることを示している。こうした流れを逆流させるきっかけとなったのが1980年8月である。それは、眞の自治、眞の社会化に向けての偉大な転向点であった。

### 社会化とは何か？

社会化という言葉はさまざまに理解されている。社会化と国有化との混同を避けねば、一定の社会状況、あるいは、人々の状態を定義することは可能になる。ローマ法王ヨハネ23世は1961年の回勅（“Mater et Magistra”）で、社会化を「絶え間なく増大しつづける市民間の相互依存」の事実として認め、それは「社会のさまざまな共存形態に生命を吹きこむもの」とされた。増大しつづける相



互依存、それには良い面もあるいは悪い面もある。社会化をモラルの観点でとらえれば、それを、他の人々の必要とするところと普遍的に善なるものに対して敏感に反応し、他の人々と協力して共同の仕事をする心がまえと能力を身につけること、そう表現できよう。この意味での社会化を多くの人々がわがものとしない限り、いかなる民族も、いかなる国家も存続しえない。恐怖と経済的刺激だけでは十分でない。心の奥深くからの精神的欲求と大いなる希求を社会が現に持つ場合にはとりわけそうである。

ポーランドにおいて眞の自治と眞の社会化のもとめはきわめて大きかったが、これまで自治の運動がありに制限されていた反動で、個人主義的反対社会生活に無責任な態度が育てられてきた。集団化が強制されたり他の相互依存の形態が力づくで押しつけられたりして、個人の人格は踏みにじられ、下からのイニシアティブはつみとられて社会的な人格の形成は困難であった。だが、もし社会がのびのびと発達し、社会の行う教育がその発達を支え、自生的なグループやサークル、人々の共同活動を組織する団体が生まれてくれば、社会の共同活動に参加する人々にとっても、さらに社会全体にとってもその影響は多大であろう。そうであってこそはじめて、社会は眞の学校となり、個人の人格は存分に花開く、そして、個人の尊厳は敬意を払われ、創造性は大切にはぐくまれ、同時に、共に働き社会的責任を果たそうという意識

が育つ。ここでパウロ6世〔前ローマ法王〕の教書(“Octogesima adveniens”)に触れてみたい。その中で法王は、今日にふさわしい民主主義の形式が必要であるという点を強調しておられる。こうした法王の勅令はとりわけわれわれにとって大きな意味を持つ。ポーランドの社会はその伝統に基づいた、今日の状況にふさわしい社会の共存形式をみずから独自につくり上げねばならない。80年8月以前のポーランドにはこうした目的をめざす運動はさほど多くなかったが、この問題でもっとも広範な活動を展開していたのは「経験と未来」DIPのグループであった。また、ステファン・プラトコフスキの「この山はそれほど険しくない」と題された小冊子も注目に値する。その中で著者は、人は社会生活において必ず何かできるはずであると説き、行動にとりかかるための実際的な助言をしている。プラトコフスキの小冊子には自治に関する短くまとまった定義が見い出される。「問題(目的)を共同で設定し、その解決(達成)を共同で行う」——これが彼の言う自治である。われわれが自治という活動の中に執行権力を導入するのは「命令を下す権力をもうひとつ別につくるためではなく、われわれの共同の仕事を組織だったものにするため」なのである。これはまさに核心をついた指摘であり、社会の自治と社会の行う教育活動の最も単純な原則である。

プラトコフスキは社会主義における自治の潮流を代表する人物であると私は考える。彼は社会の持つ教育的役割と社会的活動に占める倫理の領域を正に評価し、人間の心の奥深くにある欲求と人間の基本的権利を認めている。彼の代表する流れがキリスト教思想とある種の近親性を持ち、社会において教育的役割を果たす教会の立場に近いものであることは容易に見てとれる。彼の、階級にもとづく基本的な理念がアラモフスキの考えに共鳴しているにせよ、そうなのである。プラトコフスキの理念によれば、上級機関あるいはより広義の社会はなるべく少なく手助けをすべきなのであり、社会そのものにとって代わってはならないのである。繰り返そう、国家機関は経済単位〔企業〕や各種協会、文化団体などに援助をすべきなのであり、そうした組織、団体にとって代わったり、みずからの内部に吸収してはならない。イニシアティブと自治は下からるものであり、上から

押しつけてはならない。これと同じ立場から、現代世界における教会の役割を討議するために召集されたバチカン公会議〔1956~1965〕もまた、國家権力にあまりに大きな権限を与えることにたいして警告を発している。また、本来は個人や家族、さまざまな社会団体に課せられるべき問題までも国家がすべて解決してくれるとして受け身の期待を持つことにたいしても警告しているのである。

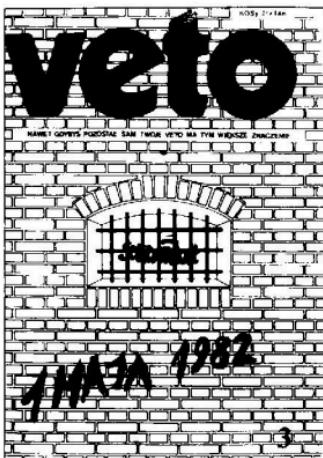
このように現実に現われている傾向は、独立した自治の社会がこれから発展してゆく方向性を示している。それは労働組合のみでなく、社会全体の発展の方向性でもある。ゆえに自治は生活のすべての分野において発展しなければならない。

〔第Ⅱ部は次号〕

〔訳注〕 Edward Józef Abramowski (1868~1918)

社会活動家、哲学者、社会学者、心理学者。ワルシャワ大学教授をつとめる。ポーランド社会党PPSの創始者のひとりで、はじめの頃はマルクシズムに近い考え方であったが、のちに「国家なき社会主義」を提唱。著作に「社会主義と国家」「社会コーポラティズムの概念」等がある。

〔週刊『連帯』第23号 1981年8月4日付  
訳：篠崎誠一〕



地下雑誌『VETO』の表紙

# 戒厳令に向かうポーランド

ヤドヴィガ・スタンシキス

Jadwiga Staniszkiis Poland on the Road to the Coup  
Labour Focus on Eastern Europe Vol. 5, Nos. 1-2

〔編集部注〕本号から数回にわけて紹介するJ・スタンシキス博士のこの論文は、1981年11月に執筆されてイギリスで発表された。原タイトルは「制度的革命」であるが、本誌では本訳文テキストに従った。著者は、1942年ボズナンの生れ、ワルシャワ大学在学中に1968年3月事件で逮捕され、7ヵ月間獄中生活を送る。80年8月以降は「連帯」専門家委員会の一員として活躍。日本でも『ポーランド社会の弁証法』(岩波現代選書)が紹介されている。

## 序 論

1980年8月の諸事件から1年を経た現在、ポーランドの権威主義官僚体制の疑似リベラル形態が、「社会契約」の正当性と懐柔的な問題解決パターンに依拠して安定することはほとんどありえないようと思われる。組織的な威圧に戻ろうとする全体主義の誘惑が公然と語られるようになってい<sup>1)</sup>る。こうした声は、ひとつには国家権力の「最後の手段」を代表するものであり、ひとつには「連帯」の要求をイデオロギー的決まり文句によって解決しようとしてることから生じる硬直性に根ざしている。<sup>2)</sup>またひとつには制度上、機構上の利害と結びついている。<sup>3)</sup>このような誘惑はさらに、もっと積極的な路線を求める、また永久的「後退」戦術に伴う深刻な身分上の諸問題を終らせたいと望む党員たちの根強い願望によって強化されてもいる。<sup>4)</sup>このような態度は、現在のポーランド統一労働者党指導部内の元「真正信者」である青年共産同盟の信仰告白によって正当化される。それによれば、支持者集団の政策が人気が高いとすれば、それはこれが真に革命的な権力ではないことを示すとして、威圧手段が正当化されるのである……<sup>5)</sup>。統一労働者党指導部の一部にとっては、「強

硬」路線のみが混沌と経済危機から抜け出すための利用できる唯一の道に見える。このこととの関連で1956年のカダルの例が時に引き合いに出される。

逆説的ではあるが上述のような変化とこれにともなって急速に進行する両極分解は、ある意味で「連帯」の内的ダイナミズムおよびその機能とは無関係である。逆に「連帯」は、第1回全国大会のきわめて政治的なレトリックや、不満を抱く大衆の口を見るばかりの突出、指導者たちの大向こう受けを狙った路線（これは権力機関を非常にいら立たせた）、そして内部のコミュニケーションをきわめて困難なものとする下部大衆の原則主義的傾向等にもかかわらず、以前よりも一層協調の用意があり、動員解除が進み、分断されているようと思われる。

強硬路線への明らかな傾斜は、何よりもまず、権力機構それ自身の内部における緊張の産物であり、国際情勢のダイナミズムにより強められている。<sup>6)</sup>それは13年前のチェコスロバキアの情勢を超現実的に想起させる。唯一の相違は、「相手」が国内におり、「介入」について語りうるとしてもそれは経済的な、目に見えない介入だということである。われわれが知っているように、1968年8月のソヴィエトの介入は、ドブチエク政府がその急進的な計画をすでに大幅に縮少し、最も警戒された人物の一部を排除し、しかも分裂しばらくなっているように見えた、ちょうどその時に起った。<sup>7)</sup>ところが相手はとるに足らない不満と集団的利害——それは本質的にごくとるに足らないもので、それゆえにドブチエク路線の稳健化によても変化しなかった——のもつかから、侵攻を決行したのである。この点で現在のポーランド情勢との間にきわめて近い類似性が存在する。というのは、ワレサの稳健路線は、「連帯」の存在そのものに根ざす党機関の基本的な身分上の問題

に影響を及ぼすことも、これを消滅させることもできないからである。1968年には、その多くが形式的・組織的な、地方分権主義的な合理性に根拠を置くこうした不満のすべてが臨界点にまで蓄積され、最後に爆発した。宣伝という「紙の戦争」の激化もまたひとつの役割を演じた。時の経過とともに、言葉による議論はすべて無意味となってゆき、ついには、「何か行動が必要である」という地点にまで追いやられた。その上、最終的介入——われわれの場合で言えば「対決」——はソヴィエトの権力エリート内部の派閥的対立にきわめて重要な根拠を有していた。

ポーランドの権力機構の現在の危機にはいくつかの次元がある。第1に、政府のレベルにおいて危機は、現実の事態の発展を統制しえない麻痺した国家機構の無能と、これと結合した国家行政機構の解体状況の進行を含んでいる。この結果、混沌は一層深まり、この混沌自体、派閥間の乱闘により政治問題化している。しかも加えて、緊張の蓄積を避けるために地域的問題に関する権限を県レベルに移譲するという戦術が、國家の舵をとるヤルゼルスキ・グループの能力を事実上破壊してしまった。第2に、党のレベルにおいて、深刻な一体性の危機がある。この中で、伝統的な単一政党の諸機能は、いちじるしく損なわれているにもかかわらず新しい役割に道を譲ってはいない。統一労働者党中央内部の対立がますます公然化するようになり<sup>10</sup>、カニアの政治的基盤が一掃されている。宣伝機関と威圧機関はますます信頼できなくなっている。「産別組合」の昔からの伝導ベルト構造の遺物<sup>11</sup>さえ最近、内部民主主義の問題をめぐつ

て分裂した。しかしながら中心的な問題は権力の真空である。支配の形態ではなく、まさにその存在そのものである。経済は、経営面におけると同じく、完全に統制をはなれているよう見える。

「強硬」路線への転換を規定する直接的要因のひとつは、おそらく、この真空を埋める方法がますます公然と語られるようになっていることである。<sup>12</sup>こうして権力の真空が深まるにつれ、ポーランド革命の独特な「制度的」侧面が一層強くなかった。この「制度的革命」とは、多元的システムへの平和的移行といった目標が公然と表明される「公然たる陰謀」と考えてよいであろう。それにもかかわらず、この革命の方法——これを政府側は最近、「紙の一撃」と呼んだ<sup>13</sup>——が支配者集団の行動能力をいちじるしく損っている。こうした方法の中で最も効果があるのは次のものである。1)ポーランドの法体系の抜け穴の活用。ポーランドの法体系は、権威主義的官僚体制に特徴的であるが、制度的構造の正式な変更を要求することなく、必要な弾力性を備えている。2)人民の正義感と法律違反に対する怒りを基礎においた合法性の訴え。これには新しい法律の制定要求が伴う。また、慎重に選び抜かれたケースにおいては、当局に対し法律順守を要求する。3)現行政制度の法的外観構造（憲法、ポーランドが調印している国際条約その他）に対する言及。4)最終的には変化の担い手として機能するような制度的組織の結成（たとえば、工場レベルにおける自主管理）。5)最後だが重要度が劣るわけでは決してない、権力の真空をあらゆる分野において埋める独立した活動。

### 【注】

- 1)統一労働者党中央委員会第4回総会の報告書を参照。『トリブナ・ルド』、1981年10月16—18日。
- 2)たとえばラコフスキは、「連帯」による食糧配給の統制要求を、経済権力をめぐる闘争であると過剰解釈をした。
- 3)第4回総会における政治局員で前内相のミレフスキの発言を参照。
- 4)第4回総会におけるシヴァクの発言を参照。
- 5)1981年2月20日の党機関会議におけるバルチコフスキの発言を参照。
- 6)第4回総会の席で統一労働者党中央委員13名が

「連帯」組合員証を破り棄てた。

7)1981年8月のウッチとグロツワフにおける飢餓行進、コニンにおけるジブシーとの人種的衝突、食糧危機をめぐるカトヴィツェとジラルドフの9月スト。

8)その最も典型的なのが、1981年9月のシチグウォヴィツェにおける炭鉱ストであった。鉱夫たちは、自分たちが過度に優遇された階層として扱われるところのないよう、土曜休日の労働に対する割増賃金を拒否した。TVインタビューで賃上げを要求した産別組合活動家に対し暴力的脅迫さえ加えられたこの事例は、悪の誘惑に対する一種の聖戦

と考えることができる。

- 9) ワレサは、全国委員会幹部会メンバーのうち政府から警戒されている人物との接触を用心深く回避している。クーロンは、1981年9月18日付の『ニエザレジノシチ』紙上で、また10月15日付の『シタンダル・ムウ オデ イフ』とのインタビューで、「救国政府」を希望する旨、公然と語った。
- 10) 1981年9月のヘイグ・グロムイコ会談後『シュテルン』誌に発表されたザミアチンのインタビュー、および10月14日付『ノーヴィ・ミル』誌上のスースロフの論文を参照。
- 11) いわゆる安定化計画がいくつもあった。3月から6月までの間、次の事実が観察された。集団農場の保護を動機とする個人農に対する扱いの厳格化。ポーランドの防衛上の義務を理由とした、大幅な投資削減計画の中止。政治情勢が変化しないならば、ポーランドに対し「均衡のとれた貿易」を強制するというソ連の脅し（ポーランドの経常収支の赤字は15億ルーブリ）。バイバコフが9月にワルシャワを訪問し、多くのコメコン諸国がポーランドのエネルギー供給を前提として、自国のための対ポーランド投資計画に着手した。のちに明らかになったことであるが、これらプロジェクトは製鉄所のようなエネルギー多消費型で、この結果、300万トンの輸出用石炭が西側市場から東側市場に振り替えられ、ポーランドの借款問題を一層深刻化させることになった。
- 12) たとえば、ブルフリク将軍である。
- 13) 「2000語宣言」との関係で。
- 14) ジリ・ヴァレンタ、『介入の分析』、ニューヨーク、1978年、を参照。
- 15) 経済社会評議会の設置を求める「連帯」の要請に応えて、閣僚会議経済委員会のクシャク委員長はこの案を検討すると約束したが、まったく同じ日（1981年10月16日）、ヤルゼルスキのスポーツマンでラコフスキにつながるウルパンは、この案を頭から拒否した。
- 16) 第9回党大会以降のストライキのうち少なく

ともいくつかは、たとえば、カトヴィツェとウッチのように食糧クーポンの発給の1週間の遅れと、その結果生じた食糧供給の混乱が直接的な原因となつた。

- 17) ワルシャワの党第一書記、コショウエクは第10回党大会を要求する800名近くの署名を集めた。中央委員会にさえ選出されていなかつたこのコショウエクを政治局に選出すべきことをシヴァクが提案した時、何人かの政治局員（クビアク、グジブ、ラベツキ）はきっぱりと彼を拒否した。10月18日にカニアが第一書記を辞任したのは、こうした対立の結果であった。同じように、フィッシュバフのようなリベラル派の地方書記たちも、それぞれの地区の「長老党员」グループの集中砲火をあびた。
- 18) 1981年3月にオルショフスキと争ったカニアを支持した大企業の党書記たちは、党則の変更をすべて阻止しているとしてカニアを公然と批判した。たとえば、ポーランド国営テレビで放映された1981年8月20のツェギエルスキ工場での会議を参照。
- 19) 産別労組の総書記が、自らの組織の過度の中央集権体制を公然と批判し、1981年10月17日に追放された。独立労働組合は警察内部にも組織されていた。そしてジャーナリスト協会と政府との深刻な対立の結果、協会のプラトコフスキ議長が党から除名された。ヤルゼルスキは現在の兵役期間を2ヵ月延長することを決めたが、これは新規召集兵がすでに「連帯」の影響下にある人間で構成されるためであった。これは中央委員会第4回総会における非常事態宣言の可能性に関する議論と符合する（1981年10月17日）。
- 20) カトリック教会、ライフのようなPAX関係者の一部、「農民連帯」、そしてヤツェク・クーロンなどの個人が「救国政府」の結成を提案した。
- 21) 「経済社会評議会」に関する「連帯」の提案についてのウルパンのコメント（1981年10月16日）を参照。



# ポーランド問題と東欧

EUROPA WSCHODNIA A POLSKA  
"kontakt" nr 3/4, 1982. X. 10

〔編集部注〕 以下に掲げるのは、西欧で活動しているソ連・東欧の亡命知識人の雑誌編集者たちの座談会である。参加者は次のとおり。

ヴラジミル・マクシモフ Vladimir Maksimov (ソ連)『Kontynent』編集長

チエンコ・バレフ Cenko Barew (ブルガリア)『Buduszie』編集長

ミヒニア・ベリンディ Mihnea Berindei (ルーマニア)『Alternativa』編集委員

ナタリア・ゴルバニエフスカヤ Natalia Gorbanevskaya (ソ連)『Kontynent』

『Russkoj Mysli』編集委員

アレクサンデル・スマラル Aleksander Smolar (ポーランド)『Aneks』編集長

ヤン・ヴラディスラフ Jan Vladislav (チェコスロバキア)『Svedectvi』編集長

ら切り離して考えることはできない。グダンスクの8月も、53年6月のベルリン蜂起から56年のワルシャワ、ブダペスト、68年のプラハを経ているのだ。ポーランド労働者の勝利——何といおうとあれは勝利だと思う——には過去30年間の東欧の反体制運動全体が反映されている。

しかし全体主義独裁の方もそれを考慮して、歴史的な政治原則、すなわち“分断して統治せよ”を基本にしている。つまり、ポーランドの労働者には、物資不足はソ連に農産物を強制的に取られているせいだと思いこませ、逆にソ連では国民に、ソ連が社会主義圏全体、とくにポーランドを養つていかねばならないと思込ませている。

こういう幼稚なデマはポーランド労働者とその指導者たちに何の効果も及ぼさなかった。闘いの最高潮時、ポーランド社会全体の支持を得ており、プロの政治家でも自己陶酔に陥る危険があったときでさえ、「連帯」指導者たちは見事な政治的成熟とプロレタリア意識を見せた。東欧労働者に対するあの歴史的なアピールがそれである。そこには「われわれの目的はあらゆる労働者の生活条件改善である。われわれは皆さんのうちで自由な労働組合運動をめざす困難な闘いに参加する決意をした人々を支持する。そして、遠からず皆さんとわれわれの代表が組合運動の経験を交換するためには会うことができると信じる」とある。

この言葉は最終的に、全体主義世界の労働者の真の解放のための闘いにおける団結の基盤になると思う。そして、もしかしたら他の世界にもあてはまるかもしれない。

スマラル 1980年夏以来ポーランドでは、ソ連圏の他の国々がポーランド内部の新しい状況に対しどういう反応をするかに关心が高まっていた。その关心にはいろいろな理由があった。もちろんある種の理想主義的なものもあった。つまり他国もわれわれと似た状況にあるから、他の国の人々と

マクシモフ ロシアと東欧の解放プロセスにおけるポーランド事件の影響は火を見るより明らかだ。グダンスク事件の影響はすでに80年末から、ソ連のバルト海沿岸諸国、ウクライナ、ロシア共和国にも見られるし、チェコの炭鉱、ルーマニア、東ベルリン、ブルガリアにも及んでいる。

東側ブロックのストや社会的動搖の高まりは初期においては偶然なものであったが、現在はわれわれの知る限り反体制運動の組織化が徐々に進んでいる。たとえば先日ブルガリアの自由労組のアピールが西側で発表され、またルーマニアの労働運動も経験と力と勢いを得てきている。ソ連の自由労組も弾圧に屈せず活動を続けている。これらはポーランドの前例の決定的な影響なしには考えられなかっことだ。

しかし同時に、ロシア・東欧の社会の再生がグダンスクの8月なしで考えられないのと同様に、ポーランドの労働運動は東欧全体の解放の過程か

一緒に自由のために闘い、助けあうべきだというものだ。しかし、より現実的な理由もあった。つまり、56年のハンガリーの経験（ハンガリー革命の隔離）およびチェコへのソ連の侵略の後、個々の国の民主化と非ソ連化は東側ブロック全体の変化なくしては不可能か非常に困難だということが明らかになつたので、ポーランド問題に対する他国世論、知識人層および支配層の反応が非常に重要な意味を持っていたのだ。

そこで、この「ボーランド病」の伝染がいかに阻止されてきたか、ここで話し合ってみたい。  
ベルンディイ ルーマニアにおいて、ボーランド事件は他の東欧圏の事件より大きな関心を持って見守られている。1977年以来ルーマニアにはいくつかの公然たる反体制運動がみられるが、これには他国事件の影響が大きかった。たとえば77年のパウル・ゴマの運動は「憲章77」の影響で起つた。79年にルーマニア初の自由な労働組合が結成されたのは「フレバノフ組合」とボーランドの事件が関係している。自由労組の綱領は「フレバノフ組合」タイプの組織に類似している。それは不満を持つ人々が共同行動を決断するが、工場内部の労組運動とは完全に異質なものだ。79年に弾圧機関がこの運動を破壊しおせるまでに、いくつかの工場で産業別労働組合ができた。その組合のメンバーたちは、何とか組織的構造をつくろうと努力した。それ以前にも77年に炭鉱ストがあつた時、炭鉱夫たちは政治的組織をつくり、代表を支配層に送りこみ、かつ他の労働者グループとの連絡をとろうとした。ただ、このストは3日しか続かず完全に鎮圧された。

どの社会主義国でも、ブロック内の他の国々の直接的影響がみられるのは当然だ。ボーランド事件についても、ルーマニアの労働者は大きな緊張をもって観察している。一番の問題は情報の欠如だ。ボーランドの状況についての情報は、批判的なものさえもほとんど流れなかった。情報が全然なくては、事件の検討にも非常な困難をきたす。唯一の情報源は自由ヨーロッパ放送だった。ルーマニアには地下出版は存在していない。もちろん何回か試みられたが、国内の労働者同士の通信と情報を効率的に組織するような地下出版社はできなかつた。これがふたつの否定的要素だ。

3つめは、知識人層に労働者を支援する反体制

グループができなかつたことだ。

自由労組についていえば、組織改造の試みもある。活動家の多くは、全ルーマニア的組織を結成するための秘密活動を選んだ。ポーランドの戒厳令直前に届いた手紙に、クナウスで開かれた〔ルーマニア地下組合〕大会について書かれていたが、労働者たちは全国レベルの代表を選出中であり、近い将来、各地でできるだけ大規模なストを打つ準備をしているということだ。

このように、ボーランドの影響は明白である。ただ、ルーマニアの弾圧はボーランドと比較にならないほどきびしい。たとえば、77年の炭鉱労働者スト後の弾圧や自由労組成後の弾圧。そして81年秋のモトル地域の非常に重要かつ大規模なストの後の弾圧——スト以来、地域全体が他の地域から遮断され、そこの労働者と連絡をとった人はいまだにいない。ジウ地方での弾圧（指導者の一部はその場で殺され、残りはいまだに行方不明）に似たような、最悪の事態が予想される。

ボーランド事件に対して、労働者や農民は全面的に好意を持っていたが、社会層が上にいくほどこの問題に対する態度はひかえめになった。もちろん関心はあるのだが、ベシミズムがそれを覆い隠した。知識人の代表は、「確かに彼らは当然のことをしてはいるのだが、成功はしないだろう。68年にはチェコ人が、その前にはハンガリー人も失敗したではないか」といつも言っている。しかし同時に、この運動に大きな期待を抱いていたことも否認できない。

12月13日は、支配層から見れば大成功だった。ルーマニア支配層は当然ながらボーランド事件をひどく恐れていた。80年8月事件後に彼らがとつたあらゆる措置がそれを証明している。  
グラディスラフ チェコスロヴァキアについていえば、われわれはボーランド人の隣人だがあまり仲は良くない。このことを深く堀り下げるつもりはないが、歴史上いくつかの問題があったことは見逃がしてはならない。わが国の体制はしばしば、〔ボーランドとチコの仲の悪さという〕切り札を使って諸問題を解決しようとしてきた。もちろん今はその話をする時ではないが、この切り札がある程度効果のあったのも否めない。

チェコの知識人はもちろんボーランドの出来事に賛成している。「憲章77」グループときままま



マツシモト

な形で協力している人々は、ポーランド人との直接的協力関係まで作ろうとしていた。たとえば共通の出版物〔『クリティカ』のこと〕を発行するとか。しかし労働者についていえば、御承知のようにチェコの経済状況は悪くなく、貧困はない。行列はあるが悲劇的ではない。行列なら戦争直後からあった。人々が憤慨するなどの状況は来ていないし食料もかなり充分にある。チェコ人の慎重さはそのためだ。また、68年のチェコ事件も慎重度を増させるひとつの要因である。

労働者たちはポーランドの出来事をよく知っていたと思うが、彼らはそれを距離を置いて眺めていた。なぜなら信用していなかったから。いや、ポーランド人を信用していなかったのではない。ルーマニアの知識人と同じく、よい結果は得られないと考えていたのだ。チェコ人はポーランド人より懷疑的なのだ。

心理学的見地からすこしつけ加えたい。1938年や68年やその他の歴史的な時点で、われわれは常に孤立を感じていた、ポーランド人、ハンガリー人、ルーマニア人たちの連帯が耳に届かなかったのだ。68年にポーランド人はソ連軍とともにチェコに進入した。いや、誤解しないでほしい、ポーランド人自身の意に反してであったことは誰もが知っている。しかし進入したのは事実なのだ。

こういうことがあったから、ポーランド事件に対する反応は比較的に冷たかったのだと思う。特別の関心を持ったのは知識人と支配層だけだった。チェコ支配層があの事件で相当ショックを受けたことは強調せねばならない。

バレフ 西側の人々にとってブルガリアは沈黙の国だろう。しかし現実には、ポーランド事件のずっと以前に、組合というよりはむしろ政治的性格を持った独立した運動があった。労働者たちはブルガリア各地でストをしたし、サポート・デュ行方も何度かあった。労働者階級いや全ブルガリア國

民の生活は政府の言うほど平穏ではなかった。

ブルガリア人は、ポーランド問題をブルガリアのマスコミや西側のラジオから知ったとは言えない。自由ヨーロッパ放送はブルガリアではルーマニアほど影響力を持っていない。これは自由ヨーロッパ放送のブルガリア語放送担当グループに問題がある。放送が、昔のブルガリアの共産主義的ラジオ・テレビのスタッフと、戦前の状態への愛着を捨てきれぬ人々、つまり、見た目には両極端の体制の代表によって編集されているのだ。

ポーランド事件を最初に伝えたのは、事件の最中にブルガリアに観光旅行に来たポーランド人たちである。また、ローマ法王のポーランド訪問の際は、ポーランドに留学したり働いたりしているブルガリア人が、ポーランドの集会に参加したりして様子を伝えてくれた。

最近われわれはポーランド問題に関するポーランドや西側の新聞記事をブルガリア語に翻訳したものを作り、約3000部を作り、国に送った。ポーランドの出来事はブルガリアの労働者や農民に強い刺激を与えており、彼らの反応は好ましく、ポーランドの労働者・農民・学生の闘いがブルガリア人自身の闘いでもあるということには疑問は全くなかった。ブルガリアの学生によってビラが作られ、工場内で集会が開かれ、労働者たちはブルガリアの労働組合本部に代表を送り、ポーランドの出来事に関する情報を要求しました。こういうことは数十年來なかったことだ。

12月13日のちょうど4ヶ月前、ブルガリアで自由な労働組合が結成された。ポーランドの「連帯」の精密な複製だった。この組合が異国にいるわれわれに対して、ポーランド人とポーランドの労働組合とポーランドのすべての出来事への連帯を表明するよう指示してきた。12月13日以降、われわれはブルガリアの組合組織が活動を停止するのではないかと思っていたが、現実は正反対だった。ポーランドの戒厳令の直後に学生の組織が結成された。彼らははじめのうち、「トルド・シンディカト」と呼ばれる労働者の組合と密接な関係にあったが、現在は安全確保のために労組から離れて、地方の大学都市に本部を置いている。

ゴルバニエフスカヤ 影響について話すとき必ずつきあたる壁は情報の問題である。人々が反応するには、情報があることが前提だ。ただ、ソ連で

はルーマニアのような情報の完全な欠如はない。ポーランド事件に関する否定的な情報は非常に広くソ連のマスコミに出ており、ソ連の読者は、共産主義国の公式報道に対する有名なアマノジャク的反射反応をおこした。すなわち、新聞が悪いと言っているものは反対に良いものなのだ、と読みとったのだ。しかし残念ながらこの反応は感情的な面にとどまっている——西側のラジオを聞いていた人々は比較的良く情報を得ていたとは思うが、それ以外の人々は「連帯」の具体的活動を知らず、現実的な結論を引き出すことはできない。

「連帯」がソ連社会、とくに労働者に与えた影響は数えあげればきりがない。いくつものスト発生の報が届いているし、ソ連において画期的なことに、スト労働者が物資供給の要求だけでなく社会的な要求も出しはじめている。多くの町で、自由労組設立委員会や個人が、直接「連帯」の経験に学ぶよう呼びかけるピラを配布した。ポーランド事件がソ連に及ぼした影響のうち特筆すべきはバルト三国への影響だ。ここ数年来それらの国では様々な規模の国家独立運動があったが、ポーランド事件は、より広い社会層に、この剥奪された独立という問題に目を向けさせた。1980年秋、目覚めさせられた民族意識はエストニアにおいて、独立のスローガンを掲げた巨大なアモとなってあらわれた。同時にエストニアとリトワニアの各地で多くのストが行なわれた。「連帯」という前例は、社会的・政治的大衆運動の成功の可能性を彼らに示したのだ。バルト三国での広範な社会的抗議は、これらの国に「ソ連の他地域より」情報が伝わりやすくなることに起因する。この国々では西側のラジオをよく聞くことができるし、エストニアではフィンランドのテレビ放送の受信もできる。また、リトワニア-ポーランド間では親類同士が行き来している。もちろんあの時期には多少制限されたが。そのうえ、バルト三国でのソ連支配の確立は他地域より遅く、戦前の労働運動の名残りが完全には圧殺されずに残っている。

マクシモフの言うことにはほぼ全面的に賛成だが、強調しておきたいのは、「分断して統治せよ」という政策が過去何回か成功していることだ。ソ連における政府宣伝担当者を囲む集会ではいつも、なぜ店の棚がからっぽで食料がないのかという質問に対して、「全部ポーランドへ送った。な



ペリ  
ティ

ぜならポーランド人はストばかりして働くかず、われわれは国際主義や両国民の友好のために彼らが餓死するのを見捨てられないからだ」という返事がされている。

グラディスラフ わが国でもそれは好んで使われる宣伝だ。しかしチェコではそれは上からの工作によるというより偶發的なものが多い。チェコではポーランド人はあまり好かれていない——たとえばオストラヴァにはポーランド人が買い出しに来るからだ。当局は当然民衆の反感を利用する。ゴルバニエフスカヤ 本当にひどい貧困があるため、こういう宣伝が比較的簡単に信じられてしまうよう思う。西側のラジオを聞き、「連帯」やポーランドの独立した運動に共感を持っていた人でも、時には宣伝でひどいショックを受けることはある。たとえば81年夏、「連帯」が肉の配給量削減（ひとりひと月3・2kgに減らされた）に対して闘いをはじめたのと同じ時期にロシア共和国の多くの都市でも配給制が導入されたが、その量はひとりひと月800gだった。こういう状況ではなぜソ連の一般市民が「連帯」に強い好感を抱いていないかもわかるだろう。ソ連ではまだに戦中戦後のひどい貧困の記憶が残っている。今は何か生きていけるが、人々は日常の諸問題で疲弊しており他のことをする力はない。このような状況下で、ソ連全土に散らばってはいながらもしばしば起こっている自由労組設立委員会の誕生や労働者の権利を守るために自由労組を作ろうとの呼びかけピラの配布などは、まさに英雄的行為だ。

結論として言えば、当局のプロパガンダは部分的には成功を収めている。人々は1968年のようにプロパガンダでだまされるのではなく、むしろプロパガンダに圧倒されている。活動を続けている少数の人々を除けば、一般市民は何も信じていない。誰も何の期待もせず、眞実を捜そうともしない。眞実——『プラウダ』——とは3カヘイカで

買えるものだと教え込まれてしまっている。

スモラル 東欧圏において、ポーランド支配層の危機を静め、「連帯」の誕生によって生じた害をくいとめるため、4つの要素から成る反ポーランド宣伝がなされていると思う。

最初の要素は今ナタリヤが言ったことだ。つまり、ソ連の支配層はソ連の貧困を反ポーランド宣伝に利用している。ふたつめは特に東独やチェコやハンガリーに見られるケースで、ポーランド人の怠慢の神話——「ポーランド人は怠け者で、その怠け者をわれわれが養わねばならない」——だ。この種の情報は特に東独で、公式的に、また「口伝えに」広められている。

3番目は、残念ながらわれわれの国々でいまだに重要な役を果たしている、「ルンペン平等主義」とでも名付けられるものだ。平等主義には2種類あると思う。ひとつは、下のものを引き上げて上にならしていくもの。もうひとつはその反対の考え方で、文化的に上位にある社会層への反感が基になっている。「連中がわれわれよりえらいわけでもないのに、なぜ彼らに特権や自由や肉を与える必要があるのか?」これがルンペン平等主義だ。

4番目は、とくにハンガリーにとって重要で、ポーランド問題の結果、クレムリンの対東欧政策全体が厳しくなる恐れがある、というものだ。これは経済的なものではなく、政治的問題だ。その場合ハンガリーのリベラリズムは存在しなくなるだろう。チェコも状況が良いわけではないが、もっと悪かった昔に戻りたいと思う人など誰もない。ヴァディスラフ その4つの要素はどの東欧の国にもみられるが、構成が若干違うと思う。それは伝統や事情によって変わってくる。しかし、中でも一番複雑なのは「ルンペン平等主義」だろう。われわれチェコ人にとって（スロヴァキア人は少し違うと思うが）ポーランドはいまだにシュラフタ〔士族〕の国だ。ハンガリーやチェコではこの階層はずいぶん昔に存在しなくなった。これもポーランド人不信のひとつの理由だろう。

ところで、認識しておくべきことがある。東欧圏のどの国でも、公的プロパガンダはあらゆる切り札を使っている。時にはそれが全く予期せぬ結果を生むこともある。たとえば、反ユダヤのプロパガンダのおかげで〔国民がプロパガンダを反対に受けとるため〕イスラエルへの親近感が生じて

いる。あまりに露骨な反ポーランド宣伝は、わが国でも逆の効果を生み出したと思うが、それを実際に観察するのはむつかしかろう。公的プロパガンダはあらゆる所に存在しているが、ポーランド問題についてのチェコ人やスロヴァキア人の非公式な見解は、はっきり言って私にはわからない。

スモラル イリ・ペリカン〔チェコの亡命者〕が言うには、80年のポーランド事件の発生直後、全般的にチェコでは懷疑主義が主流だったが、しばらくすると、こんなに長続きしているということはひょっとしてソ連はわれわれの考えるほど強大ではないのかもしれないという考えに変わっていたという。

ヴァディスラフ 懐疑的かつ pragmatique なチェコ人にとっても私にとっても、結論はひとつ、12月の戒厳令の後でもなお、やはりこれは勝利だということだ。つまり、一年半づいたということである程度の勝利なのだ。

私にとって重要な問題を述べたい。ポーランド問題では最初、公的機関の反応は非難だった。しかしその後、〔公の側から〕なぜこうなったかの論拠が示されはじめ、以前は公式には存在しないはずだった問題が公的新聞で論議されはじめた。数ヶ月前、『ルデ・プラヴォ』〔チェコ共産党機関紙〕に、異なる社会構造の模索に関する記事がのった。（このテーマで今まで様々な文化や経済の構造について述べてきたのはもっぱら反体制派だった）。これはまちがいなくポーランド問題の影響から来たものだ。公的プロパガンダといえども、チェコで実際に起こっていることについて書き始めざるを得なくなったということだ。

警察と弾圧についても言いたい。警察はあの時期非常に緊張しており、なすすべを知らなかつた。この点は重要だ。もちろん今すぐ何かが変わることはなかろうが、将来大きな変化をもたらすかもしれない。

12月13日の影響はわれわれにも及んだ。80年8月以来チェコでは値上げはなかったのに、12月13日直後に値上げが行なわれた。当局は勝ったつもりになったのだ。〔以下次号〕

〔訳：梅田芳穂・高橋初子〕

# フレサ委員長の釈放と戒厳令停止について

## 「連帯」の見解と立場

〔編集部注〕昨年秋以降ポーランド「連帯」をめぐる情勢は大きく変化している。11月8日、ローマ法王の83年夏ポーランド訪問が決まり、11月10日闘争は「不発」に、そして11月12日、フレサ委員長が釈放され、戒厳令解除の意向が当局からもらされ始めた。こうした動きを「連帯」はどう見ているか。

### 和解の前提

ヤルゼルスキ宛てのフレサ書簡

La deuxième lettre de Walesa à Jaruzelski  
"L'Alternative", No. 20, P.39

1982年12月4日

將軍閣下

戦争状態終結の声明が、あらためて私に閣下に宛てて筆をとらせました。今はもはや、過ぎ去った年月の問題や事件を取りあげるべき時ではありません。そうではなく、今は事態改善の真の希望を明らかにすべく、未来に向けて扉を開くまたないチャンスなのです。この希望を人々は何よりも必要としているのです。現在の深刻な危機の克服を可能とするには、何よりもまず社会全体の努力にほかなりません。外国の援助を得ることもひとしく不可欠ですが、これも現在、政治的な理由のために停止されています。社会的努力の覚醒と世界におけるポーランドの地位の強化は、もっぱら、社会と権力との間の相互的な信頼の再建によってのみ可能となります。この目標を実現するためには1980年8月の合意を基礎にしなければなりません。戦争状態の宣言以来、政府により、また閣下により、1980年8月以前の事態に復帰する可能性はない何度も宣言されました。希望を呼びさし、社会的安定に寄与するための唯一の方法は、社会の期待に応えて進むことでありましょう。

そのためには何よりもまず、労働組合活動のために、また抗議行動を理由として、戦争状態下で有罪を宣告された人々に対する大赦が必要です。当然のことですが、拘留者はすべて、私が釈放に先立って説明を受けた法の定めに従い、戦争状態が終結されれば自動的に釈放されるものと考えています。第2に、組合活動を理由として、あるいはただ組合に加入していたというだけの理由で、

戦争状態期間中に解雇された人々の元の職場への復帰。この（解雇の）問題は社会的にきわめて重要であり、痛苦にみちた無数のうらみとなま傷を生み出しています。第3に、労働組合に関していえば、多元主義の原則への復帰により現在の行き詰まりを打破しなければなりません。

現実に対し眼を閉じることのないすべての人々にはっきりしています。労働者階級は現在進められている解決を受け入れてはおらず、また政府の立場が労働者階級により受け入れられないかぎり、われわれは前へは進めないと。この方向に進むことによってのみ、真の社会的・政治的・経済的・文化的な和解への道が開かれます。この目的の実現を可能とする仕事に私も参加する用意があります。他人に対し厳しい態度で臨み人にひざまずいて和を乞う必要はありません、なぜなら、国のためによかれと思うならば、和解は1個の必然だからです。しかし、国のためによかれと思う者はすべて、和解を受け入れる用意を持たなければなりません。

レフ・フレサ

### フレサ委員長の釈放を歓迎する

1982年11月20日

「連帯」在外調整局

われわれは、われわれの組合の委員長レフ・フレサが監禁を解かれたことに対し多大な喜びを表明するものだが、同時に彼がいまだ自由を取り戻してはいないことを強調したい。それは単にポーランドが依然戒厳令下にあるためだけではなく、われわれの独立自治労働組合「連帯」が非合法化されているためであり、組合複数主義の原則が破棄されているためである。数千人の組合員が刑務所で、ある者はすでに判決を受け、ある者は裁判を待ち

ながら暮らしている。その他にも、当局の発表によれば千人が拘禁されたままである。数万人が解雇され、生計の道を奪われている。

レフ・ワレサの解放は、全世界の民主的労働組合と国際世論の支援を受けたポーランドの抵抗運動の最初の成果であることを認めつつ、上述の理由からわれわれは、すべての友人たちに、以下の目的のための闘いを継続されるよう訴える。

戒厳令への抵抗のかどで有罪判決を受け服役中の者すべての大赦。

拘禁者すべての釈放。

組合活動を理由に解雇された者すべてを元どおりに復職させること。

戒厳令の撤廃。

複数組合主義を回復し、独立自治労働組合「連帯」の法的存在と活動を可能にさせること。

ブリュッセル 1982年11月20日

独立自治労働組合「連帯」在外調整局

## 11月10日闘争はなぜ敗北したか

1982年11月12日

「連帯」グダンスク地区調整委員会

I 「連帯」地区調整委員会によって宣言された11月10日の抗議行動はグダンスク地区では失敗に終わった。これは「連帯」地下組織ができて以来始めての敗北であった。われわれはその基本的理由を以下のように考える。

(1) 次の要素からなる、前例を見ないほど広範な当局側の対抗措置。

a) 兵籍とZOMOへの編入——グダンスクとグディニアの主要な工場の勤労者約千人が編入された、およびストライキ期間中に活動を行なった者は編入されるであろうとの工場当局の予告。

b) 予防拘禁。

c) 工場内への多数の軍パトロールと保安部隊の導入。

d) スト参加に対する過酷な投獄刑と解雇による脅し。

e) 抗議行動の中止を呼びかけるにセビラの配布。

f) デモが予告された場所におけるこれまでにななく多数の警察の集結。

(2) 「連帯」暫定調整委員会が予告した11月10日の抗議行動に、ポーランド首席大司教が否定的な態度を示したこと。

(3) 「連帯」非法化直後に起きた自発的抗議行動からまだ日が浅かったこと。

これらの事情から、地区調整委員会の呼びかけが受け入れられ実行されるのは非常に困難であった。そして、これら抗議行動不発の理由は、われわれの当初の分析でそれらの要因の考察が不充分であったことを示している。

II われわれは、レフ・ワレサ委員長釈放の発表を満足を持って受けとめた。しかし、「連帯」のため、市民の権利をとり戻すために闘って獄中にある人が、まだ全国で数千人もいることを忘れてはならない。それら獄中の人の数は日増しにふえている。グダンスク地区的逮捕者・服役者は450人である。彼らはグダンスク、ポトウリツエ、フォルドンの刑務所におり、数十人はいまだストエビエリネク、クフィジン、ダルウヴェク、ウプクフの収容所に拘禁されている。

グダンスク 1982年11月12日

独立自治労働組合「連帯」

グダンスク地区調整委員会

ボグダン・ボルセヴィチ

アレクサンデル・ハル

ボグダン・リス

レシェク・シフィテク

## 情勢の特徴と今後の展望

1982年11月22日

「連帯」暫定調整委員会

1982年11月22日、独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会の会議が開かれ、国内状況の分析と組織上の問題の検討がなされた。3つの宣言が採択された。

### 宣言第1号

当局と社会との間の合意のための条件は過去何度

が提示された。しかし独立自治労働組合「連帯」およびその他の組合の非合法化という形で、当局側は真の合意に到達する可能性を拒絶した。レフ・ワレサの釈放とヨハネ・パウロ2世のポーランド訪問受諾は、休戦の単なる申し出としか考えられない。休戦は、戒厳令の解除と戒厳令に関連する法令の廃止をもたらすものでなければならない。現状において、この休戦が社会的対立の政治的解決をもたらし、同時にまた将来における合意の可能性を創り出すためには、少なくとも以下の要素が実現されねばならない。

すべての政治犯の釈放。

すべての組織と、創造的、学術的、科学的協会、とくに文学、芸術、映画協会の復活。

社会の懸案事項であった検閲の規制を旧に復すること。

このような休戦が達成され、【将来への】政治的保証の中に企業の完全な自主運営の回復も含まれるとすれば、ポーランドの経済危機解決に適した雰囲気が生まれるだろう。ここに述べた保証なしでは、戒厳令の解除も、社会の基本的な期待を満たすには不充分であり、当局側の虚偽のjesusチャーチしかならないであろう。

## 宣言第2号

11月10日の経過は、11月までの戦術に疑問を投げかけるものであった。そのため、独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会は、新たな戦術を編み出すという問題に直面している。レフ・ワレサの釈放、ヨハネ・パウロ2世のポーランド訪問の日どりの発表、そして戒厳令の解除の見通しは、全く新しい政治状況を生み出した。当局と何らかの形で停戦できる可能性があると希望してよいかも知れない。こうした状況を考え、われわれは、12月の抗議行動を呼びかけた10月20日付の宣言を撤回することを決定した。しかし、12月16日が1970年12月の犠牲者の記念日であることに変わりない。またこの日は、戒厳令直後にブエク炭鉱で殺された炭鉱夫たちを記念する日でもある。この日に、1970年と1981年の12月の犠牲者たちのために記念行動をし、花や花輪を献じ、ミサを捧げるよう、われわれは呼びかける。

## 宣言第3号

独立自治労働組合「連帯」のレフ・ワレサ委員長は解放された。初めて公衆の前に姿を現わした時、彼は言った、「私は今も、そして今後も、1980年8月の理想に忠実である。私が賢明に、つまり勝利につながるように活動するためには、まず第一に現状をしっかりと認識するための時間が必要である」。

われわれはレフ・ワレサの決定を支持する用意のあることをここに宣する。「連帯」は非合法化されたとはいえ、彼はなおわれわれが民主的に選んだ組合委員長である。彼の釈放は、当局との休戦の新しい可能性を作り出した。われわれはこの機会を利用する用意がある。

同時にわれわれは、「連帯」第1回全国大会の原則と綱領にのっとって活動を続けることを表明する。暫定調整委員会が解散を決定するための条件を規定できるのはレフ・ワレサだけである。われわれは、そのような決定が下されるのは、政治的理由から自由を奪われている人々が全員釈放された後であると信ずる。労働組合の自由と市民の権利の回復が、依然としてわれわれの活動の目標である。

1982年11月22日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会  
ズビグニェフ・ブヤク  
ヴワディスワフ・ハルデク  
ボグダン・リス  
ヤヌシ・パルビツキ  
ユゼフ・ピニオル  
エウゲニウシュ・ジュミエイコ

90  
DZIEN  
NIEWOLI

訂正 前号3頁左欄14行目および4頁左欄12、13行のPRONの訳注〔国民救済愛国評議会〕を〔国民再生愛国運動〕に訂正します。

# ポーランド日誌

12月1日 NATO諸国は、ポーランド政府が戒厳令を12月13日に解除するとの非公式の情報を受ける。文化省は全国俳優協会を解散させる。

12月3日 「連帯」海外調整委員会のイエジ・ミレフスキ代表は日本での記者会見で、世界各国の労組、労働者に対し、精神的、物質的支援の強化を求める。国会筋は12月23日まで戒厳令は解除されないと語る。

12月5日 軍政当局はポーランド映画製作協会を解散させる方針を決定。

12月6日 「連帯」マゾフシェ地区のブヤク委員長は、「連帯」地下文書「週刊マゾフシェ」を通じて戒厳令停止後の闘争戦術を明らかにする。

12月8日 国営PAP通信によると、拘留されていた「連帯」の活動家など30数人が釈放される。

12月12日 ワレサ委員長はヤルゼルスキ議長にあてた12月4日付の書簡を公表する（本誌32頁参照）。ヤルゼルスキ議長は戒厳令の停止を発表する。

12月13日 国会が開かれ、戒厳令の停止に関する法案が提出される。

12月14日 ワレサ委員長は、12月16日に予定されていた演説の内容を西側記者に発表、その中で、「連帯」は非合法化されたが「われわれの内部に生き続けており、必ず勝つだろう」と強調した上で、目的の達成を急ぎ過ぎたかもしれない、と反省し、「われわれはもっと時間と別の方法が必要だろう」と述べ、また「公然たる、あけっぴろげの、民主的な手段を取ること」を主張し、「あらゆる民主的な手段を利用して、労働者が運動によってかちとった権利を再び獲得するよう」訴え、そして「われわれは権力の転覆を企図しているのではなく、世界と歴史が作り出した政治的現実を受け入れる」と締めくくっている。

12月15日 ワレサ委員長はグダンスクの地方検事局から出頭命令を受けるが拒否する。

12月16日 ワレサ委員長がグダンスクの白宅から警官隊に連行され約8時間拘束される。この日は同委員長が釈放後初めて公衆に向かって演説する計画だった。

12月17日 ザワツキ法相は、戒厳令の停止に伴い「拘禁者は釈放される」が「比較的少數のグループは逮捕

され、国家反逆罪で裁判にかけられることになろう」と語る。

12月18日 国会は戒厳令停止に終む法案のうち、国家評議会に停止の権限を付与する法案を全員一致で、また、規制措置に関する立法を賛成多数、棄権9票で可決する。

12月19日 ポーランド国家評議会は前日の国会で付与された権限に基づき、戒厳令を12月31日に停止することを決定する。

12月20日 当局はワレサ委員長連行の理由として財務上の疑惑を調査するためであると述べる。

12月23日 PAPによると内務省は戒厳令停止に伴い「連帯」関係者の釈放と全収容所の廃止を指令する。なお、起訴されているKORメンバーのミロスワフ・ホエツキ、ヤツエク・クーロン、ヤン・リティンスキ、アダム・ミフニク、ズビグニェフ・ロマシェフスキ、ヘンリク・ブエツ、及び収容所内で新たに逮捕されたA・グヴィアズダ、S・ヤヴォルスキ、M・ユルチク、K・モゼレフスキ、G・バルカ、J・ルレフスキ、A・ロスピウォフスキの各氏「連帯」関係者を釈放されない。ワレサ委員長は「7人が取り残されたのは悲しい。全力を挙げて彼らの自由を勝ち取りたい」と語る。アンドロボフは訪ソ中のヤルゼルスキと会談。

12月27日 PAPによると戒厳軍事法廷は「連帯」の幹部ピオトル・ベドナシに4年の刑を言い渡す。

12月28日 PAPによると政府は、「連帯」の資産を新労組に移管することを決定する。また、政府は83年も肉、砂糖、バターなど生活必需品の配給制を継続する方針であるという。

12月29日 国会は経済安定化3ヵ年計画および83年度国家予算などを採択し閉幕する。救國軍事評議会は81年12月の戒厳令布告以降1年余りにわたる活動を総括するとともに83年1月1日から移行する戒厳令停止期間中の活動方針を策定する。

12月31日 午前零時に戒厳令が停止される。BBCの特派員に退去命令が出される。

1月3日 ワレサ委員長は、逮捕された「連帯」幹部7人宅を訪問するため、1月5日から全国行脚を開始する計画を明らかにする。

1月4日 政府スポーツマンは、82年12月末逮捕に切り替えた「連帯」幹部7人が国家転覆計画の容疑に問われていることを明らかにし、7人は共謀して武力で国家転覆、国防力弱体化を試みる活動に従事したと指摘。ワルシャワ市当局は西側報道機関に対し一部ポーランド人の雇用登録受け付けを拒否する措置をとる。

〔編：鶴崎公敏〕

## 『ポーランド月報』既刊号目次

第5／6号 1982・7・25 36頁 500円	
軍政3ヵ月——ポーランドの政治状況	2
ユーモアは死なず	10
黄金の角笛を手にして——地下抵抗闘争指導者 への公開状 J・クーロン	11
反核運動のこと ポーランド民族国家のこと 前野良	15
再起した「農民連帯」	16
ポーランド文学の偉大な経験——ポーランドの 亡命文学者たち K・ディブチャク	18
ポーランドは豊かな国のはず	
A・グヴィアズダ	24
地底の闘い——シロンスク 1981年12月(下)	
フェリクス・シフィエトリク編	28
ポーランド日誌(1982・5・6～6・28)	34
ユーモアを武器に	35
「ポーランド月報」全目次(創刊準備号～4号)	36
第7号 1982・9・30 32頁 400円	
国際世論への向けての公開書簡 A・ミフニク	2
「連帯」の思想と地下闘争の戦術 A・M	4
戒厳令下の「連帯」の現状	8
「連帯」在外調整ピューロー声明	9
2072日 M・ノヴァコフスキ／工藤幸雄訳	10
ポーランド解放国民委員会の成立 K・ケルステン	13
「死の教室」が語るもの——カントールの来日 公演から 扇田昭彦	20
新聞に載らないポーランド——82夏訪問記 高橋圭	22
まぼろしの「ポーランド映画改革案」 草壁久四郎	24
資料— 映画改革案テーゼ	26
ポーランド日誌(1982・6・30～9・3)	31
第8号 1982・10・31 32頁 400円	

## 編集後記

あけましておめでとうございます。本年もよろしくご指導、ご援助のほどお願い申し上げます。

ポーランドでは戒厳令が「停止」され、それとともに日本のマスコミのポーランドに対する関心は日に見えて薄れつつあるようです。このような時にこそ、われわれ資料センターの役割は決定的に重要なになると、一回決意を固めています。会員、読者の皆様の一層の

## 社会自衛委員会KOR——その思想と軌跡

KORを想う 工藤幸雄	2
「連帯」在外国際局声明	6
地下「連帯」声明	7
リビンスキの演説／KOR解散声明	7
KOR設立宣言	12
新労組法に対する地下「連帯」の声明	11
1982年8月31日	
ビラ	13
ボグダン・リスの演説	13
警察官に呼びかける	16
総括と展望 地下「連帯」	16
勤労者自主運営——文献と資料	18
勤労者自主運営法テーゼ(案)	19
マゾフシェの見解	21
なぜ勤労者評議会を退出すべきなのか	22
「連帯」の思想と地下闘争の戦術(下)	24
新聞に載らないポーランド(下)	27
資料—映画改革草案テーゼ(下)	28
ポーランド日誌(1982・9・5～10・10)	31
事務局通信	32
第9号 1982・12・10 28頁 400円	
国会における新労組法反対演説	2
「連帯」解体に抗議を B・リス	6
グダンスクは闘う 「連帯」解体に抗して	7
自主運営を自らの手に	11
私はなぜポーランドに帰るか	
J・J・リブスキ	14
『ロボトニク』インタビュー	16
次は何か——現状と展望 J・クーロン	20
われわれはどこへ向かうのか B・リス	22
「連帯」が直面した問題	
J・シフェンツキ氏に聞く	24
ポーランド一人旅 金田光雄	26
ポーランド日誌(1982・10・10～11・29)	27

ご協力ををお願いします。

『月報』掲載資料に未紹介の新資料を加えてドキュメント集『ポーランド不屈の〔連帯〕』(工藤幸雄監修、ポーランド資料センター編訳、柘植書房、2000刊)が出版のはこびとなりました。ぜひお読みいただきたいと思います。

お願い 本誌から資料、図版等を転載される場合、その旨ご連絡下さい。なお、掲載誌紙を一部、事務局あて必ずお送り下さい。